

最低不審者ドゥルーク

RYUZEN

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——その日、高町なのはは人生最初の“友達”と出会った。

目次

第1話	それは最低の不審者なの？	1
第2話	不法侵入は最低なの！	12
第3話	魔法の呪文は最低なの？	24
第4話	第四の壁が崩壊しているの	35
第5話	作戦は最低最悪なの！	46
第6話	不法侵入は最低なの？	55
第7話	キング・クリムゾンが最低なの！	63
第8話	最低なテンプレートなの？	71
第9話	本当を知るためのトビラなの？	90
第X話	この物語はフィクションです	98
第XI話	友達さ	116
第XII話	ナイスだろ？	129
第XIII話	未短くお忘れを	148
設定資料		163

第1話

それは最低の不審者なの？

高町なのはが人生最初の「友達」と出会ったのは、まだ小学校に入学する前のことだった。

小学千年生になった今になっても忘れられない。あの頃の自分を占めていた感情はひたすらの孤独感だった。

切っ掛けは父・高町士郎がボディーガードの仕事中に重傷を負い生死の境を彷徨う大怪我を負ったことである。といっても別に父親が入院したことが孤独感に苛まれた直接の原因だった訳ではない。父が大怪我を負ったのは勿論悲しかったが、自分には母と年の離れた兄姉きょうだいがいた。父が入院によって家からいなくなっても、もし母や兄姉が近くにいれば寂しさは感じてでも孤独感はなかっただろう。

ここまで言えばもう察しがつくかもしれないが、要するに高町なのはが孤独感を味わったのは、父ばかりでなく母と兄姉も近くからいなくなってしまうからなのだ。

父親が意識不明で重態というのは、精神的のみならず経済的にも大打撃である。

幸いにして高町家は喫茶店『翠屋』を営んでいたため、いきなり収入が途絶えるというような事は起きなかった。

それでも父親の収入がなくなることによるダメージは大きい。父・士郎の入院費用に三人の子供の養育費。金は幾らあっても足りないのだ。

母が仕事で家を留守にする時間が長くなり、兄と姉もそんな母を支えるため懸命に頑張っていた。今思えばこの時の母は『想像もしたくない万が一の事態』すら覚悟していたのかもしれない。

だが嬉しい事に母の心配は杞憂で終わった。重態だった父が意識を取り戻し、程なく退院したのである。

後遺症でボディーガードの仕事が続ける事は難しくなったが、そんなことは父が助かったという事実と比べればとるにたらない些事である。

父・士郎はボディーガードを引退して喫茶店経営に専念。収入は減ったが家族と過ごす時間は増えて、命の危険もなくなった。突然の試練が襲い掛かったものの家族が一致団結して乗り越えて、幸せな日常を取り戻すことが出来ました。めでたしめでたし………と、終えられただろう。もしも高町家が四人家族だったならば、だが。

父が入院して、母と兄姉きょうだいもない家で、高町なのはは孤独だった。

誰が悪いという訳でもないだろう。あの時は家族全員が必死だったのである。まだ幼い子供に必要な最低限しか構えなくなるのも仕方のないことだ。

だから寂しくても我儘は言えなかつた。母も兄姉も父が入院して大変なのに、何もで

きない自分が『構って欲しい』だなんて言うのは迷惑だろう。

もし小学生ならば同級生の家に電話するなりして孤独を紛らわす事が出来たのかも
しれないが、生憎と幼稚園児ではそうはいかない。

友達の代わりに孤独を紛らわしてくれたのは読書やPCだった。特に読めば終わりの本と違って、無限大の情報飛び交うネットの海へ繋げるPCは恰好のアイテムだったといえるだろう。

だが気を紛らわすにも限界がある。どうしても孤独感に耐え切れなくなった時、決まってするのは近所の公園に行く事だった。

理由は分からない。きつと特に意味なんてなかったのだろう。

だからその日もいつもと同じように公園で黄昏れて、夕暮れ時に帰る……筈だったのだ。

「やあ、お嬢ちゃん。リストラ喰らって意気消沈中のサラリーマンみたいな顔して何やってるんだい？」

高町なのはの孤独を埋めてくれる人は、本当に突然に——まるで別世界からやって来たようなタイミングで現れた。

趣味の悪い青いスーツに、これもまた趣味の悪い髑髏柄のネクタイ。覗き込むようなグリーンの瞳は猫のように爛々と光っている。年齢は……良く分からない。十代のよう

にも見えるし、二十代のようにでもあるし、三十代のようにも思える。もし口を真一文字に閉じてさえいれば二枚目と断言できた悪魔的美貌の持ち主だが、おどけたように緩んだ口元と軽そうな雰囲気、外見的魅力を完全に相殺していた。

「貴方は——」

明らかな不審者だ。きつと十人に聞けば十人がそう断言するだろう。

世の子供達と同じく自分もまた親から『知らない人に声をかけられたら気をつけなさい』というような注意はされていた。なので両親が望む『良い子』として行動するならば、ここは謝るなりなんなりしてその場を退散するべきなのだろう。

だが何故か当時の自分はそうはしなかった。これはもう理屈では説明できないだろうし共感も得られないだろうが、何故か自分はこの初対面の不審者に対して安心感すら抱いていたのである。

「誰……ですか？」

何て応えようか。そう十秒ほど迷った挙句に口から出てきたのは、そんな当り障りのない問いかけだった。

彼は暫し頭を捻ると、

「ニートヤー」

「!？」

「中学生の時から不登校になり、高校も行かなければ定職にもつかずバイトもせず、生活保護と親の年金で生活しながら、ほぼ一日中ネットサーフィンして過ごしているよ！
将来の夢はラノベ作家かな！」

爽やかな顔して、とんでもないことを言い放った。

「な……い、幾らなんでもそれはちよつと酷すぎるの！」

「じゃあこういうのはどうだい？ 僕は大企業の社長の息子で、なんやかんやで有り余るほどの遺産を相続した高等遊民。これなら同じニートでも上等そうだ」

「……………お金はあっても、やっぱり仕事はしていた方がいいと思います」

「なら神様転生して最強能力貰ったオリ主とか？」

「真面目に答えて下さい」

「んー、そんなに僕のオリジンが知りたいって？」

「そういうわけじゃ、ないですけど」

「オーケーオーケー。なら音楽家志望のフリーターということ手で手をうとう。これなら文句はないだろう？」

「あの。結局なにがなんだか分からないの」

「頭がこんがらがったんならば、大人の癖に自由時間がたっぷりある暇人程度に認識してくれればOKだよ。別に僕が仕事をしているとかいないとか重要でもなければ伏線

でもない。

君だつて背景に映つてゐるようなモブキャラの好きな食べ物とか知つたつて面白くもなんともないだろう。ストーリーの流れにまつたく関与しない情報なんて態々設定しなくてもなんとかなるものさ。

だからPCの画面でこのssを見ているお前等も気にしないでスルーしてノープロブレム！ 男にプライバシー詮索されて興奮する変態じゃないから僕。

例外は女の子！ 特に爆乳でパツキンな女の子いたら連絡してチョーダイ！ これ僕の電話番号ね」

「読者……？」

まったく訳の分からない事を、何も無い方向に向かつて一方的に喋りながら、男は素早くメモ帳に電話番号を書いて貼り付ける。

どうでもいいが何も無い空中に紙を『貼り付ける』なんて地味にマリツクもびつくりな超魔術だ。

「ごめんなさい。なにを言つてるのか分からないんですけど」

「そのまんまだぜい、リトルデビルン。読者つていつたら読者。この二次創作を見ている読者のことさ。」

ボカアね。凄い魔力でコズミックとか根源とか太極とか集合無意識的なアレとどう

たらこーたらしてあーたらこーたらな設定になってるんだぜい。

見えてる以上、僕としては作者の前作は超えたいわけで。ここは一つこの二次創作の主人公として読者にアピールしておかないといけないじゃん。ついでに僕好みのおにゃのこ釣れたら大勝利ってね」

(もしかして、この人は危ない人なの?)

正体不明の安心感で緩和されていたが、ここまで支離滅裂な言動を間近で見ると、流石に危機感を覚え始めた。だが、

「ノーノーノーノー。ボカア確かにデンジヤラスでクールなハンサムだけど、君に対してだけはいつでも良い人さ」

「!?!」

自分が心の中で思ったことを見透かされ戦慄する。

「どうして私が思ったことを?」

「だって書いてあったじゃん。(○)の中に」

「……………」

おどけたように言う不審者に、聞いてもまともな回答は得られないとなのはは幼いながらに悟った。考えても仕方のないことだし、この不審者の言動については話半分で聞き流した方が良さだろう。

この数分間足らずの会話でこの不審者（仮名）が如何に常識の通用しない男かを理解したなのは結論した。

「話を最初に戻すけど——」

不審者は緩んだ空気を引き締めるように固い口調で、

「君はなにをしてるんだい？」

最初の疑問を口にした。

もし同じ事を聞いてきたのが普通の大人であれば、自分はきつと『良い子』らしい返答をしただろう。ただ相手が漫画のコメディリーフのような不審者だったせいで、変な反抗心からなのは挑戦するように。

「……さっき私の心を読んだみたいに、なんでも分かるんじゃないんですか？」

もしかしたら父が事故に合ってから子供を我慢し続けてきた高町なのはにとつて、それは本当に久しぶりの子供らしい反応かもしれないなかった。

「そりゃアニメは無印からstssまで見たし知ってるに決まってるじゃん。だけど台本的に僕がこう聞かないと展開が進まないんだよねえ。って、さっきから僕が第四の壁ブレイクしまくった台詞フリーダムにくっちゃべってるからプロット滅茶苦茶なんだけどね。」

というわけで先を続けよう。ちなみにこの二次創作の正しい流れは俺の問いかけに

対して、なのはちゃんが『おとーさんが……』から長々と現在の境遇を喋るって具合だ」
ツツコミたい。どうして自己紹介もしていないのに自分の名前を知っているのだとか、アニメやら無印やら s t s やら数々のツツコミ所が気になって仕方がない。

だがこの不審者に理屈だとか常識なんてものを求めるのは無駄だと理解したばかり。なのはは不屈の心でツツコミ欲を抑え込んだ。

「うーん、けどハーメルンの読者層的にそんな原作主人公の分かり切った身の上話とか
退屈だろうし、僕も他人の不幸話とか白けて寝るだけだしカットしよう」

自分勝手な理論で定まっていた展開を平然と踏み躪る不審者。

しかしカットするのは百歩譲っていいとしても、それだとカットした分の余った尺が
どうするのかという問題が発生するのではないだろうか。

「ハーメルンの一話の最低文字数推奨は2500字だからいいのさ。足りなくなっても
ちやくんと2500字以上になるよう調整しとくから。テキストな話で！」

物語の本編と関係ない無駄話を長々とされても、読者だって困るだろう。ガンダムの
話をしている所にマクロスをぶちこまれるようなものだ。

本筋に関わる話とはいかないまでも、ちゃんと本編に連なる話で空白は埋めるべきで
はないだろうか。

「五月蠅いぞアホ。この二次創作 s s の主人公は僕なんだぜい。僕の好きなようにやる

「さ」

「……あの。さつきから誰と話してるんですか？」

「地の文だよ。挿絵すらない二次創作ssにおいて僕が如何にセクシーなのかを唯一表現してくれるナイスガイド。なのはも適当に媚び売つといたほうがいい。そうすれば『天使のような可愛さ』とか表現してくれるかも」

「結構です」

不審者の悪魔の誘いを、なのははばつさり切り捨てる。そも然り。未来の魔王にたかだか一介の悪魔風情の甘言が通じる筈がないのだ。

そもそも媚びを売るまでもなく、なのはの可愛さは天使である。

「じゃあないね。じゃあテキストにジョジョで最強のスタンドについて議論して穴埋めを——」

「待つてくださいい！」

「ん？」

「それよりも……その……名前を、」

「名前？」

「名前を、教えてください。なのはの名前だけ知ってて、私は知らないのはずるい……と、思います」

「尤もな意見だ。では改めて」

少女とはいえ女性の名前を一方的に知っておきながら、自らの名前は伏せるなど紳士のすることではない。

この不審者は別に紳士ではないが、少なくとも高町なのには対しては「真摯」であろうと心掛けていた。

故に男は名乗る。己を証明する名前を。

「ドウルーク。僕の名前はドウルーク。未短くお忘れを。君の———「友達」になる男だ」

そうやって男は悪魔のように微笑んだ。

第2話 不法侵入は最低なの!

高町なのはは夢を見ていた。

自分と同じ年くらいの少年が、得体の知れない怪物と戦って、そして力及ばず倒れる夢を。

倒れた少年は返り血に濡れた手を伸ばす。まるで見えない誰かが差し伸べた手を掴もうとするかのように。

『誰か、僕の声を聞いて。力を貸して。魔法の……力を』

少年の助けを求める声。それを最後に夢は終わる。次になのはが聞いたのは携帯電話のアラーム音に設定した着メロだった。

「ふあく。何か、変な夢見ちゃった」

欠伸をしながら高町なのはは目覚める。

閉ざされたカーテンの間から覗く直射日光を手で遮りながら、なのははパジャマから制服に着替えるためベッドから立ち上がろうとした。

「奇遇だね。僕も変な夢見ちゃった」

「!」

頭上から降ってきた声に驚いて、なのはは視線を天井へ向ける。結果としてなのはは変な夢を見て目覚めて直ぐ、忍者のように天井に張り付いた変な男を目の当たりにするという災難に見舞われる羽目になった。

もしもこれが他の人ならば自分の部屋の天井に張り付く不審者を見たら悲鳴をあげて助けを呼ぶだろう。だが天井に張り付いている男は不審者是不審者でも、高町なのはにとつて家族の次に、或はそれ以上に馴染み深い男だった。

「典型的魔法少女のお供キャラだけどフェレットかあ。ボカアやつぱり狐だねフォックス！ リリカルおもちや箱とか他の二次創作ssみたく久遠ちゃんお供にしないかい？」

戦いの中で友情を育み、ゆくゆくは僕のセックスフレンド兼ガールフレンドになってくれると最高！ おい作者、久遠……出せよな？」

天井からシュタツと物音をたてずに着地しながら、画面に向かって自分の願望をぶちまけるドウルーク。

それとドウルークなんて核弾頭があるのに、更にキャラを加えると確実にプロットが崩壊するので、久遠を出す気はない。

「さ、最低なの！ それとドウルーク！ 私の部屋に入ってくるのはいいいけど、ちゃんと玄関からって前にもしたお願いしたよね？」

「……辛いこと聞くなよ。見た目平均二十代後半のオッサンが朝っぱらから正攻法で九歳児の部屋に入れるわけないだろう。親御さんってゴールキーパー突破する苦勞、なのは分からないだろうな」

「それはそうだけど」

一般常識からすれば当たり前のことだが、このドウルークがなのはの友人でいることを両親の士郎と桃子は快く思っていない。ドウルークが玄関から入ろうとしても、両親は丁重にお断りして断固として中に入れようとしないだろう。

二人とも基本的には子供の自主性を重んじる教育方針なので強硬手段こそとっていないが、本心ではドウルークと付き合って欲しくないと思っているのは明白だった。

自分にとって最初の友達をそんな風に思われるのは正直良い気はしない。だが一方でなのはも子供ながらにドウルークが社会不適合者であることは分かっていたので納得もしていた。

「それより頼むぜいなのは。僕が態々両親&兄姉ブロックを掻い潜って、ルパン三世の如く華麗に潜入したのはなのはの寝顔っていうお宝獲得以外にもう一つあるんだ」

小学三年生らしからぬニート息子を養う母親のような溜息を吐いたなのは、自分の机の中に隠してあったトレイを取り出してドウルークの前に置く。

「はい。昨日の夕ご飯の残り」

「おおっ！ 心の友よ〜！」

大袈裟に感涙しながらドウルークは残飯を胃の中に流し込んでいく。

見ている気持ち良くなるほど豪快な食べっぷりは、ドウルークがどれだけ腹を空かせていたかを如実に表していた。

「やつぱり桃子さんの夕食は最高だ。おっぱいもデカいし美人だし、今の旦那と別れて僕のガールフレンドになってくれないかな。紐にして欲しいね！」

「それを娘の私の前で言うの？」

「遠回しにママのこと褒めてるつもりなんだけど伝わらない？」

ジト目で咎めるようにドウルークは見据えるが、剽軽な態度はまったく崩れることはなかった。

「だれどご飯が美味しいのは偽りなしだぜい。ううくん、デ〜リシヤス。ここ最近……

モグモグ……ゲップ……ここ一週間ほど塩パスタと公園の水ばつか食べていた胃に……染みる……染みるう……。ボカアこの味のために一週間頑張ったんだなあ」

「……ドウルークってフリーターさんなんだよね。フリーターさんってそんなにお金がないの？」

「いや？ ボカアこう見えてやり手だからね。月に50万は稼ぐよ」

「50万!?!」

予想を遥かに超えすぎた額になのはは目玉が飛び出るほどの衝撃を受ける。

月に50万なんて相当の高収入だ。これだけ稼いでいれば現代社会では十分に勝ち組という評価を受けるだろう。それをこのチャランポラン不審者が稼いでいるという事実がとてもではないが信じられなかった。

だがそうなると疑問が出てくる。そんなに稼いでいるのにどうしてドウルークはこんなに困窮しているのかという疑問が。

(もしかして嘘を——)

「吐くわけないよん。ボカア嘘吐きだけどなのはに対しては正直者なんだぜ。知ってるでしょ?」

「うん、そうだよね」

心の中をこうして見透かされるのも五年間付き合ってきたもう慣れっこになっていた。今更驚きはない。

「じゃあどうしていつもお金がなくて困ってるの?」

「……………高級ソープって高いんだよ。僕は面食いだから五回も行けば月収は消し飛ぶ」

「最低なの!」

「僕も頭では分かっているんだよ。風俗嬢に貢ぐより僕のルックス餌にして素人ひっかけ

たほうが安上がりだって。けど上半身の脳味噌は納得しても下半身の脳味噌が納得してくれないんだ。お蔭でウシジマくんは二百億の借金して二百回臓器売る羽目になったよ。

なのは。人生の先輩からの教訓だ。風俗嬢に貢ぐ男は破滅する。ただし僕以外に限るってね。勉強になったかい？」

「なるわけないの」

そもそも小学三年生の前で堂々と『風俗』だの『ソープ』だのと言うドウルークは傍から見れば単なる不審者の変態である。

町の安全を守るお巡りさんがドウルークを見れば、自身の警察官魂にかけて逮捕することを誓うだろう。

「なのはーっ！ なにをしてるの？ もうご飯できているわよー！」

「あ、はーいー！」

母親からの声になのはは慌てて飛び上がる。携帯電話を見ればもうとつくに朝ご飯を食べている時間だった。

「食器は帰って来てから洗うからラップしておいてね」

「あいよ〜」

ドウルークが目を瞑っている間に素早く着替えると、なのはは部屋から飛び出して

く。

この日、結局なのは朝食を碌に食べることが出来なかった。

ドウルークのマシンガンの如き電波発言に一時的に忘れていたが、家から出て学校へ行けば脳裏を過ぎるのは今朝見た夢のことばかりだった。

民族衣装のようなものを身に纏った少年が怪物に襲い掛かれて、血を流し倒れる。夢で見た同じ光景が、まるでリピート再生に設定されたDVDのようになのはの脳内で何度も何度も繰り返される。

こんな調子で学校の授業に集中できる筈もなく、授業中ずつと上の空だった。

「なのは。聞いているの、なのはー」

「ふえー! アリサちゃん?」

「アリサちゃん、じゃないわよ。まったくもう」

「あ、アリサちゃん。落ち着いて。なのはちゃんも悪気があったわけじゃないんだろ
う」

可愛く腕を組み、拗ねたようにそっぽを向くのはアリサ・バニングス。そんなアリサを宥めているのは月村すずか。二人とも小学校に入学して出会った高町なののはにとつて大切な「友達」だ。

状況を判断するについて考えるのに夢中で、アリサの事を無視する形になっていたらしい。なのは慌てて謝る。

「ご、ごめんね。ちよつと考え事してて。何の話だったっけ?」

「将来の話よ! 将来なになりたいかって話! 今日もホームルームで話してたじゃない!」

「そ、そうだったっけ?」

記憶の糸を探ろうとあたふたするのはを見て、アリサは不機嫌さ全開で溜息をつく。

「アンタね……まさかまたドウルークのこと考えてたんじゃないわよね?」

「ち、違うよ!」

「ふーん、どうだか。べ、別に私はなのはがドウルークなんてのに夢中になろうと気しないけど、ちゃんと私達の事も見なさいよね。友達なんだから」

「ちよつと言い過ぎだよアリサちゃん。……けどなのはちゃん。授業中に別のことを考えるのは良くないと思うよ?」

「うう、反省してるの」

いざとなれば不屈の心で困難に立ち向かうのはも、今回は自分が完全に悪いだけに全面降伏だった。

それにしてもドウルークのこの全方面における人望のなさはある意味凄まじいものがあった。アリサは言うまでもないにしても、基本的に誰に対しても優しいはずかまでドウルークの事を快く思っていないのだから。

少なくともものは知る限りにおいて、自分の友人知人の中でドウルークに好意を持つ者は皆無だった。なのは自身を除けば、だが。

アリサとすずかの二人の説教を受け、取り敢えず最低限の集中力は取り戻したものの、それでも今朝の悪夢が目蓋の裏から消えることはなかった。

黒板に意識を集中してもふとした拍子に悪夢の事を思い出してしまう。そして学校が終わり、アリサとすずかの二人と塾への近道を行く途中。

「カットカットカットお〜!」

塾に行く途中、今朝聞こえた声なのは脳内に直接響いて、

「だからカットだって! ほら地の文ストップ! なのはサイドの話は終了。こつから視点は僕、ドウルークに向けて」

地の文に一方的にカットを命じて、強制的に視点を自分側へ持つてくるといふ暴挙を行つたドウルークは、フリーターの分際でマフィアの親分のようにふんぞり返りながらビールを煽っていた。

派手な服装も相まって座っているのが黒いソファであれば様になっていたのだろうが、腰を下ろしているのが公園のベンチという事実が全てを台無しにしている。

「おやおやく。本来中立であるべき地の文からそこはかとなく僕に対する悪意みたいなものを感じるね」

当たり前だ。これから折角なのはとユーノのファーストコンタクトを描こうと気合を入れれていたのに、いきなりドウルークみたいな不審者に邪魔をされれば不愉快にもなる。

どんな血生臭いバイオレンスなシーンだろうと、砂糖のように甘いリア充のイチヤコラシーンだろうと、地の文である以上は決して目を背けず事実を書き連ねなければならぬ。だが幾ら地の文だって我慢の限界というものがあるのだ。

この核弾頭級の地雷主人公ドウルークはプロローグ除けばたった1話目にして、地の文を激怒させるといふ暴挙を行った。これはもう許されざることだろう。よって今後ドウルークの描写については事実をまともに書くことはやめ、出鱈目ばつか書き連ねたいと思う。

「H A H A H A H A H A H A！ ジョークがきついね。ボカアこれでもこの二次創作の主人公なんだぜ。もっと大事に扱ってくれよ」

他人から大事に扱われたいのなら、他人を大事にすることを覚えたほうがいいだろ

う。

「わーお。正論がクリーンヒット、こうかーばつぐんだ! けどさ。どうせこつからなのはがユーノ発見からの動物病院連れてくってアニメ焼き増しの展開でしょ。」

正直さ。ボカアもういいと思うんだよね。読者もぶっちゃけ飽きてるでしょ。だって他のリリカルなのはのs sで飽きるほど見てるし、この流れ。

リリカルなのはのs sが世の中にどんだけあると思ってるのさ。画面の向こうの読者も『またこの展開かよ……』とか『この流れ知ってるから、さつさと先に進めろ』とか思ってるよ? 絶賛うんざり中だからね」

だがもしかしたら原作未視聴で、このs sが初リリカルという読者もいるかもしれない。い。

そういうもしかしたらの為に、幾ら原作通りの展開でもちやんと書くべきだろう。「アホか。原作がエロゲだとか同人ゲーとかで買うのが難しいってなら分かるぜ。でもリリカルなのはちやんとアニメ化してんだろうが。DVD化されてんだろうが。全国のレンタルビデオ屋で絶賛貸し出し中だろうが。」

おうコラ。このs s見てる読者、お前等の中に原作未視聴者がいるんならさつさとブラウザバックだ。今直ぐTSUTAYAなりゲオなりに行ってレンタルしてこいや。だけど違法動画視聴はやめろよな! みんなの友達! ドウルークとの約束だ!」

一介のオリキャラ風情が読者様に命令するとは何事だ。この地雷極まる主人公のせいで不快な思いをされた読者様がおられたのならば、この場を借りて謝罪致します。まことに申し訳ありません。

というか本当にいい加減にしろドゥルーク。画面の向こうの読者様はオリキャラと地の文の地雷臭丸出しの漫才なんてものに興味なんてないのだ。

ユーノとのファーストコンタクトの下りはもうグダグダなのでカットするにしても、そろそろ次の展開に進まないと読者が飽きてブラウザバックしかねない。そうすれば人気にも関わる。

「人気……それは不味い。日刊ランキングにのれなくなる！ 仕方ない、ここは百歩譲ってなのはサイドに話を戻すとするぜい。さーて！ ボカアなのはがファーストバトルでピンチになった時、華麗に登場しないといけないから入念にアップしないとね。ガトリングガンとかクールかな？ というわけで読者の皆。人気アップのため見た後でサクッと10評価をしちゃってくれよ。お気に入り登録もばんばん頼む。じゃあね！」

虚空に向かって自分の要望を一方的に告げるドゥルーク。だがその問いに答える者はいなかった。というより答える気力がもはやなかった。

第3話

魔法の呪文は最低なの？

色んな事があつた一日だった。朝の悪夢に始まり、ドウルーク来訪、そして最後に学校帰りにアリサやすずかの二人と一緒に見つけた怪我したフェレットである。

怪我の治療のため動物病院へ連れて行つたが、獣医だつて慈善事業でやっているわけではない。幸い院長先生が良い人だったので明日まで預かつてくれることになったが、それまでにフェレットの引き取り先を見つけないならなかった。

といってもアリサの家は犬を、すずかの家は猫を。其々かなりの数を飼っていてフェレットを飼うのは難しい。そしてなのは家は喫茶店で、ペットを飼うのはNGである。

しかし捨てる神あれば拾う神ありとは言つたもので、駄目だしで両親にお願いしてみたら、籠に入れて世話をするならばという条件つきでOKを貰えた。

「そうだ！ アリサちゃんとすずかちゃんに伝えておかないと！」

ポケットから携帯電話を取り出す。きつと今頃二人もフェレットをどうしようかと頭を悩ませている頃だろう。

「アリサちゃん、すずかちゃん。あの子はうちで預かれることになりました。明日、学校

帰りに一緒に迎えに行こうね。なのは。送信つと」

漸く肩の荷が降りたなのは、ベッドに身を投げ出して一息つく。

だがこの時のなのは知らなかった。これまで起きた事など所詮はプロログに過ぎない。高町なのはの人生を変えた事件は、これより始まるのだということ。

本当の始まりを最初に告げたのは、脳内に直接響いてくるあの声だった。

「聞こえますか？ 僕の声が聞こえますか？」

朝に聞こえたのと同じ——そして怪我したフェレットを見つけた時にも聞いた少年の声。

「聞いてください。僕の声が聞こえるあなた、お願いです！ 僕に少しだけ力を貸してください！」

鬼気迫った声色は少年が危機的状況にあることを如実に現していた。

「あの子が喋ってるの!？」

昼にこの声が聞こえた時、自分は怪我したフェレットを見つけた。あの時は特に意識していなかったが、もしこれが偶然ではなかったのならば、この声を発しているのはあのフェレットということになる。

馬鹿げた考えだ、とは思ふ。常識的に考えて動物が人間の言葉を喋るなんて有り得ないし、ましてやテレパシーみたいに危険を発信してくるなんてナンセンスだ。

けれど高町なのには常識を鼻で笑う非常識極まる友人が一人いた。

「お願い！ 僕のところへ！ 時間が、危険がもう」

声が途絶える。高町なのにもう迷いはなかった。

フェレットを預けた動物病院に到着したなのはを待っていたのは灰色の世界だった。外観は何一つ変わっていない。学校帰りにアリサやはずかと一緒に来た時のままだ。だというのに虫の鳴く声や遠くから聞こえる喧騒などが忽然と失せていて、さながら異空間めいた雰囲気漂っている。

それが「境界」と呼ばれる魔法である事を無論この時点でのなのはは理解していなかったが、感覚的にここが外界と隔絶された空間なのだということは認識した。

「——はっ！」

化物染みたくぐもった唸り声が響いてくる。静寂に満ちた空間にあつて、それは嫌になるくらい聞こえてきた。

そして視界の端に黒い毛むくじやら怪物から逃げるフェレットが映り込む。

「あ、あれは！」

こちらへ逃げてきたフェレットをなのはは咄嗟に受け止める。

「な、何々？ 一体、何？」

「来て……くれたの？」

「喋った!」

「どうやら自分の予感は正しかったらしい。フェレットは頭に響いてきたものと同じ少年の声で、人間の言葉を使い語り掛けてきた。」

「本当なら『どうして喋れるのか?』だとか聞きたい事は山ほどあったが、どうもそううかうかもしていられないらしい。毛むくじやらの怪物の真つ赤な目が自分を睨んでいた。」

「う、その、何が何だかよく分かんないんだけど、一体、何なの?何が起きてるの?」
黒い怪物から脱兎のごとく逃げながら、なのはは自分の腕の中にいるフェレットに言う。

「正直長くは逃げられそうにない。こんなことなら体育の授業をもっと頑張っておけば良かった、となのはは運痴な自分を呪った。」

「君には資質がある。お願い、僕に少しでも力を貸して!」

「資質?」

「僕はある探し物のためにここではない世界から来ました。でも、僕一人の力では思いは遂げられないかもしれない。だから、迷惑だとわかってはいるんですが、資質を持つた人に協力して欲しくて。お礼はします。必ずします。僕の持っている力を、あなたに

使って欲しいんです！僕の力を。魔法の力を！」

「魔法？」

「お礼は必ずしますから」

喋るフェレット、黒い怪物、異世界、遂には魔法ときた。まるでTVで見るアニメや漫画のような展開に思考回路が追いつかない。

しかしそんな中でも正しい選択肢を、光差す未来への活路を見いだせるのが主人公が主人公たる所以である。

「お礼とかそんな場合じゃないでしょ！ どうすればいいの？」

「これを！」

ユーノが首にかけていた赤い宝石を手渡してくる。

「暖かい……」

「それを手に目を閉じて、心を澄ませて！僕の言う通りに繰り返して！ いい？ いく

よ！」

「うん」

ともかくここはこのフェレットに従うしかない。なのは言う通りに目を閉じようとして、黒い怪物が触手を伸ばしてくる光景を見た。

「っ！」

逃げようとするが間に合わない。コンクリートブロックすら粉碎する触手だ。小学三年生の頭などそれこそトマトのように潰し、赤い中身を飛び散らせるだろう。

握りしめた赤い宝石が火のように熱くなる。心臓が裏返り、桃色のエネルギーが全身を駆け巡った。

迫りくる触手は止まらない。近付いてくる「死」から逃れるためなのはは目を瞑り、「やめろおおおおおおおつー！」

なのはは友の叫びを聞いた。次いでなのはの脳を揺さぶるのは、雷鳴よりも激しいガトリングガンの発射音だった。

毎秒数百発というこれまた常識外れのスピードで葉莖を吐き出すガトリングガンは、何故か魔力体であり対物理に強いはずの黒い怪物にも容赦なくダメージを与えていく。つまりそれはガトリングガンの弾は実体弾ではなく魔力で構成されているという証左でもあった。

「これは魔法……凄……これほどなんて……」

腕の中にいるフェレットはガトリングガンの破壊力に戦慄していた。

こんな非常識極まる事やっつてのける人間は、なのはの知る限りでは一人だけ。

「記念すべき原作主人公の初バトルでなにをやらかそうとしてるんだ。小学三年生の『背徳触手プレイ』禁断の放課後」なんて僕がプレイしてるエロゲみたいな真似を！

R—18タグつけずにR—18な内容やったら利用者規約に違反するでしょ。これだから小学三年生を小学千年生なんて誤字やらかす馬鹿作者は困るんだ。千年生って小学生なのにどんだけ留年してるんだよ。齡1000歳超えの婆じゃないの。白骨通り越して化石になってるよ。

つまり僕が言いたいことは一つ！ やるなら十八禁版を個別に作ってそつちでやってくれ！ 息子共々頑張つちやうから！」

「ドウルーク！ きてくれたの！」

「おつといけない。女性読者のために露骨な格好良さを演出しなければ。———そうさ、なのは。君を助けにきた。言っただろう？ 君の危機にはいつ何時であろうと駆け付けると」

「……そんなこと言われた覚えはないの」

「今はそんな事はどうでもいいんだ。重要なことじゃない。それよりあの化物は僕が抑えている。その間になのは、その小動物の指示に従うんだ」

「わ、分かったの！」

ドウルークは何処からともなく巨大な盾を出現させると、黒い怪物の突進攻撃を遮る。

少し心配だがドウルークなら大丈夫だろう。なのはは再びフェレットに視線を落と

すと、

「続きをお願い。なんて言えばいいの？」

「……………え、あ、はい！」

ドウルークの滅茶苦茶な戦いに困惑していたフェレットだったが、なのはの言葉に我に返ると『不屈の心』を真に呼び覚ます契約の言葉を紡ぐ。

「我、使命を受けし者なり」

「我、使命を受けし者なり」

「契約の下、その力を解き放て！」

「えっと、契約の下、その力を解き放て！」

「風は空に、星は天に」

「風は空に、星は天に」

「そして、不屈の心は」

「そして、不屈の心は」

導き手によって、白い少女は魔導の道へ足を踏み入れる。扉は開いた。あとは最後の宣誓をするだけ。

フェレットに言われるでもなく、手の中の宝石から流れ込んできた言葉をなのはは強く叫ぶ。

「この胸に！ この手に魔法を！ レイジングハート！ セットアップ！」

『Stand by ready. Set up.』

果たして赤い宝石は起動した。

魔法文明のない地球にあつて今日まで碌に使われることなく眠っていた魔法を使う才能。リンカーコア。

それが一気に解放され、莫大な魔力が宝石から噴き出すように眩い輝きを放った。

「なんていう魔力だ……やっぱり、なんて才能なんだ」

「こ、これからどうすればいいの!?!」

「落ち着いてイメージして！ 君の魔法を制御する、魔法の杖の姿を！ そして、君の身

を守る、強い衣服の姿を！」

「そんな、急に言われても。えっと、えーっと……」

魔法の杖は取り敢えず魔法少女アニメでよくあるステッキにするにしても、強い衣服というのはどうすればいいのだろうか。

なのはが強い者と言われてまず真っ先に思いつくのは、剣術家である父と兄弟だが魔法というイメージとは対極にある。強い魔法使いといえばハリーポッターに出てくるヴォルデモートが浮かぶが、流星になのはもあの恰好は嫌だった。

最終的に思いついたのは、学校の制服を魔法少女チックにアレンジしたもの。

「と、取り敢えずこれで！」

緊急時で迷っている暇はない。なのははその服を選んだ。瞬間、赤い宝石——レ
イジングハートの光がなのはの体を包み込む。

黒い怪物相手に戦っていたドウルークは、その様子を見て悲鳴をあげた。

「不味いな。アニメや映画媒体ならあざとい萌えとあざとい燃えを両立させる変身シー
ンも、小説媒体じゃ碌に表現できない。作者に画力があれば挿絵を挿入できるんだけ
ど、ないものねだりは出来ないし。」

しょうがないな。ボカア読者のことを二番目くらいに考えている出来る主人公だけ
らね。代わりに変身の様子を実況するよ。というわけでアンパーンチ！」

さつきまでの防戦一方が嘘のように軽く黒い怪物を殴り飛ばすと、ドウルークは彼以
外認識出来ない第四の壁に向かって一方的に捲し立て始めた。

「吹きすさぶ風を泳ぐ花のようなBGMをバックに、我等が原作主人公・高町なのはは九歳
……視聴者の生着替え初挑戦！ 宙を舞う妖精となつてくると回り、ああつと！

ここで唇で軽く振れるお子様キッスをレイジングハートにプレゼントオオオオ！

そして読者待望の瞬間がやって参りました。中の人は永遠の十七歳、高町なのは。s
tsでは中の人を追い抜きました。目を瞑りながら……脱げたああああああつ！

シャツとパンツを残して一斉キャストオフ！ なのはが目を瞑る中、観客は逆に目を見

開きます。

だが終わらない！ まだあるまだある！ まだ！ まだ！ 期待を一身に背負つてのダブルアクセル！ 竜巻に呑まれるようにシャツが、そしてスカートがッ！ ぬげたああああああああああああ！ スツポンポオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！ 九歳女子のスツポンポオオオオオオオオオオオオオオオオオンツツ！！ 夜風に晒された幼女の肢体いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！

地面を揺らすほどの大音量で叫ぶドウルルーク。そこでまだ途中だというのにドウルークはトイレへ駆けこんでいった。トイレからは『二期放映決定おめでとう！ 叫べ！ バースト・リンク！！』という雄叫びと光速を超える超光速で何かを扱くような音。

ドウルークがトイレから戻ってきたのは、なのはが完全に変身を終えた後のことだった。

「ふう。あれ、終わった？」

「……最低なの」

取り敢えずなのはは、色々やらかした不審者に養豚場の豚を見るような視線を向けておくことにした。

第4話

第四の壁が崩壊しているの？

ドウルークのせいで当初のシリアスな雰囲気はコスモの彼方へ飛んでいったが、それで敵がいなくなってくれる訳がない。

いや興奮めという言葉では足りないほど空気が台無しになってしまったので、敵が人間だったなら仕切り直しということで退いてくれたかもしれないが、残念ながらなのは達にとつての敵は知能も糞もない黒い毛むくじやらだ。パワーはあれど知能は皆無の化物が『空気を読む』なんて高度な思考が出来るはずもなく、怪物は大口を開けてなのは呑み込まんと迫ってきた。それがコメデイに墮ちつつある展開に対する健気な抵抗に見えてしまうのは目の錯覚だろうか。

「つて、襲つてきたの!?! ドウルーク!」

どうにか魔法少女的なコスチュームに変身出来たとはいえ、攻撃魔術なんて碌に知らないのはドウルークへ助けを求める。だが、

「記念すべき原作主人公初バトル。こういう重大イベントはちゃんと写真にとつておかないと。十年後くらいにエース・オブ・エース秘蔵写真とか言つて写真週刊誌にでも売れば良い値がつくだろうーな。頑張れなのは! 僕の預金通帳を潤すために!」

「最低なのー！」

さつきまで格好良く黒い怪物の足止めをしていたのはなんだったのか。

頼りになる時は異常なほど頼もしいドウルークだが、本人にやる気がないと何の役にも立たない。そのことを知っていたなのは、駄目元で『レイジングハート』というらしい魔法の杖に向かって叫ぶ。

「レイジングハート、お願い！」

『Yes, mama master』

レイジングハートはドウルークの数億倍はまともで頼もしかった。通常の魔法使いの杖とは違い確固たる人格を宿したレイジングハートは、なのはの魔法を使って登録済みの魔法を能動的に実行する。

『Protection』

なのはを守るように桃色の障壁が展開される。オートで発動したもので術式の質には拙いものがあつたが、代わりに魔力の量が莫大だった。

障壁に突進した黒い怪物は、大型トラックと正面衝突したスクーターのように粉々になつて吹き飛んでいった。

「や、やったの？」

「小学三年生から『殺つたの？』とは未恐ろしいねえ。だけどなのは、そいつは使い古さ

れ過ぎてお約束化した失敗フラグだぜ」

「え、う、嘘！」

粉々に飛び散った黒い破片が次々に一か所に集まっていき、さながら粘土細工のよう
に元の大きさに復元していった。

「倒しても復活するなら、どうやって止めたらいいの？」

「惑星破壊クラスの一撃叩き込みや死ぬんじゃね？」

「そんなことできないよう！」

「まあまあ。そういう疑問があつた時は魔法少女のお供キャラに訊くのがお約束だぜ。
僕が答えてもいいんだけどさ。ボカア台本無視してアドリブするのは好きだけど、台本
にある他人の台詞奪うのは好きじゃないんだよ。だからそのフェレットちゃんに存
在意義つてやつを果たさせておやりな」

台本だとかいう戯言はスルーするとして、確かにドウルークの言う通りだ。

フェレットに従つて魔法少女に変身したのだから、これからどうするのかはフェレッ
トに尋ねるのが一番だろう。

「教えて！ どうすればいいのかを」

「え、あ、はい！ あれは純粹な魔法生物じゃなくて、忌わしい力の元に生み出されてし
まった思念体です。あれを停止させるには、その杖で封印して、元の姿に戻さないとい

けないんです」

「よくわかんないけど、どうすれば？」

「さつきみたいなのに、攻撃や防御などの基本魔法は、心に願うだけで発動しますが、より大きな力を必要とする魔法には、呪文が必要なんです」

「呪文って、あいあむぎぼんおぶまいそーどみたいなの？」

「それともアバダ・ゲダブラとか？」

「全然違います」

なのはとドウルークの呪文は揃ってばっさり切り捨てられた。

「心を澄ませて。心の中に、あなたの呪文が浮かぶはずですよ」

黒い怪物は肉体の再生に時間をとられている。先程みたいに呪文を唱えている間に攻撃を受けたら洒落にならない。なのはは素早く自分自身の心中に意識を埋没させて、精神を研ぎ澄ませた。

するとフェレットのアドバイス通り高町なのは自身の心から、自分に相応しい自分を現す呪文スベルが浮上してきた。

「オンコロコロコミックタナカタロウハウチュウジンジョージワシントンハサクラノキヲキリマシタデモユルサレマシタソレハナゼデシヨウソレハワシントンガマダオノヲモツテイタカラサシジヨウサイキヨウサイアクノシシヨウトソノデシカンケツシタノ

デミテネメザセルイケイランキングナンバアワン」

「ちよつと黙つてて！ 集中できない！」

「オーライ」

耳元で意味不明な言葉の羅列を呟いて邪魔する友人は黙らせた。

敵へ向き直る。黒い怪物は再生を完全に終えたようで、原始の殺意を滾らせながら真つ直ぐ自分を睨んでいる。

恐怖はあつたがそれを不屈の心で乗り越えて、なのははレイジングハートを真つ直ぐに怪物へと照準した。

「リリカルマジカル。ジュエルシード、封印！」

『Stand by Ready』

黒い怪物が全身から触手を生やして牙を剥く。だがもう恐れはない。怪物が近づいてきた瞬間、その体を桃色の魔力鎖が雁字搦めに拘束して動けなくした。

これではレイジングハートが誘導してくれる通りに魔力を流し込み、封印の魔法を発動するだけ。

「リリカルマジカル、ジュエルシード、シリアル21、封印！」

『Sealing』

黒い怪物を怪物たらしめていた大本のエネルギー。それが封印の魔法によって封じ

られていく。

肉体が魔力で構成されていた怪物である。魔力を失えばその体は消滅するのが道理というもの。黒い怪物は跡形もなく消え去り、残ったのは青い宝石だった。

「これがジュエルシードか」

ひよいとジュエルシードを拾い上げたドウルークは封印処置が施されたそれをポケットに入れる。

「横流ししたらソープ何回分かな」

「さ、最低なの……」

「ジョークさ。犯罪で得た金でソープへ行くなんて嬢に失礼だ。ちゃんと借金して行くよ」

「……同じくらい最低だと思うの」

なんだかんだで自分を助けに来てくれたことといい、この最低発言さえ抑えてくれれば皆もドウルークの事を認めてくれるかもしれないのに。

だが自分を取り繕わないからこそそのドウルークである事も理解しているので、なのとしては文句が言えなかった。

「あの。別にそんなところに入れないでもレイジングハートにはジュエルシードを収納する機能も——」

「そんなことよりいいのかい？　ここ凄いい惨状だぜ」

「へ？」

言われて辺りを見渡してみれば、黒い怪物によって滅茶苦茶に破壊されたアスファルトや塀が嫌でも映り込んだ。

既に結界は解除されている。騒ぎを聞いた近所の住人の誰かが警察に通報してもおかしくない。というか既にパトカーのサイレンが聞こえ始めていた。

「なのは……カツ丼、食べてくか？」

前科一犯の四文字がなのはの脳裏を過ぎる。

「そ、それは嫌なの！　とりあえず……ごめんささーい！」

三十六計逃げるに如かず。高町なのはは全力でその場から逃走した。

「というわけで遺跡発掘を生業とするフェレット人間ユーノ・スクライアは、乗ってた时空艦船が謎の事故にあつて21個のジュエルシードを地球へポツシユート！　責任を感じたユーノきゅんは勇敢にも単身で地球へ乗り込み、あっさりとジュエルシードの思念体に振り返り討ちになっちゃったというわけなんだよ。ちなみにさつき封印したやつ含めて回収したのは二個ね」

「つて、えええええええええええええええええ！」

パトカーのサイレンから逃れる様にやって来た公園で、ドウルークは鼻糞をほじりながら衝撃の真実をぶちまけてきた。

さつきまではこつそりとなのはのパンチラ写真を盗撮とかしていたものの、ギリギリでプロットの流れから外れない許容範囲内の行動で留めていたのに、なんとしかもう色々なものが台無しである。

「喧しいぞ地の文。ぶっちゃけ読者は耳が腐るほど聞いた説明回なんて求めてない。うんざりしてる。だからボカア読者の要望に応えて鬱陶しい説明をスパツと済ませたんだよ。それでも詳しく知りたいっていうのならあれだよ。原作見ろ、以上」

「またドウルークが訳の分からない事を言いだしたの」

「なのにはドウルークの『原作』だの『地の文』だのは意味不明の妄言にしか聞こえない。

しかし一方でドウルークがそんな妄言と一緒に言った事は大抵が本当だということも承知していた。故にジュエルシードのことやユーノの事も本当のことなのだろう。

「けどまだ二個ということは残りは十九個かあ。先が長いの」

「どうしてそのことを？」 僕、話しましたっけ」

ドウルークの事を知らないユーノは、話していない事情が知られていることに驚いて

いるようだった。

気持ちは大いに分かるが、ドウルークの友人であるなのはが言える事は一つだった。

「諦めたほうがいいよ。ドウルークは非常識人さんだから。あ、私はなのは。なのはつて呼んでね、ユーノ君」

「ボカアなのはの友達のドウルーク。尊敬する人はフリーザ様、DIO様、ヴォル様。ちなみに独身よろしくね？」

「ドウルーク……？ それって……」

なのはからドウルークの名前を聞いたユーノは首を傾げた。

異世界の人間であるユーノがドウルークの名前を知っている筈がない———という常識的考えはドウルーク相手には通用しない。そもそもなのはだってドウルークが何者かは未だよく分かってないのだ。もしかしたらユーノは異世界でドウルークの名前を聞いたことがあるのか、或は別の理由か。

「ユーノくん？」

「あ、なんでもないよ。宜しくね」

ユーノから差し出された小さな手を摘むように握つて握手をする。

フェレット人間の友達なんてドウルークに負けず劣らず変だが、友達が増えるというのはいいものだ。心が広まる心地がする。

「それで不躰なお願いで申し訳ないんだけど、僕の魔力が戻るまでの間、ほんの少し休ませてもらいたいんだ。一週間、いや5日もあれば力が戻るから、それまで」

「戻ったらどうするの？」

「また一人で、ジュエルシードを探しに出るよ」

「それは駄目だよ。もう話を聞いちゃったし、放っておいたらまた怖い怪物さんが出てきちゃうんでしょ。そしたらきつと傷つく人が出ちゃう。見て見ぬ振りは出来ないよ」

「だけど、さっきのように危ない事もあるんだよ？」

「大丈夫だよ！ 困っている人が居て、助けてあげられる力が自分にあるなら、その時は迷っちゃいけないってお父さんも言ってたし。いざとなればドウルークが守ってくれるもん。ね？」

「……………まあ誠意を見せて欲しいよね。ユー、どんだけ払えるのYO」

「つてお金とるの!？」

ドウルークもこの街に住む人間なのだから、皆を守りたいと思う心は同じはず——
—というなのはの幻想はあっさりどぶち殺された。

テレビドラマに出てくるがめついい関西人のように、ドウルークは親指と人差し指の先端をくつつけお金のサインを出して迫る。

「これでもボカア次元世界では伝説の囑託魔導師の傭兵、漆黒の稲妻、フランクリン・

オツペンハイマーとして活躍していたという今考えた設定があつてね。傭兵は無料で動きはしないんだよ」

「フリーターだよね、ドウルークの職業！」

「お金でしたら、僕の貯金からで良ければお支払いしますけど」

「ほう。幾らだ？」

「遺跡発掘で得た収入がそこそこあるので、この世界の通貨で百万円くらいならお支払い出来ると思います。管理外世界の通貨に換金するには時間がかかるので今直ぐは無理ですけど」

「ユーノきゅん太っ腹！ よっ、大統領！」

報酬に百万円出ると聞いてドウルークは乱舞していた。正直近所迷惑なので止めて欲しかった。

どつと疲れが押し寄せてきて嘆息したのは、友人の義務として呟く。

「……最低なの」

第5話 作戦は最低最悪なの！

ユーノと出会って一週間。最初は初めて触れる『魔法』という地球外技術に困惑のあったのだが、そこは持ち前の才能で修正することができた。

魔法に慣れればそれに比例して作業効率も上がり、気付けば集まったジュエルシードは五つ。このままのペースでいけば後三週間で全てのジュエルシードを回収することが出来るだろう。

そして今日は日曜日。学校もない日なので一日中ジュエルシード搜索をするべきかとも思っただが、

『今日は約束があるんでしよう。もう五つも集めたんだし、休憩しなきゃ駄目だよ』
というユーノの提案もあって、今日は素直に休む事にした。

本音を吐露すればここ一週間は学校・塾・ジュエルシード搜索の過密スケジュールだったのだ、休みというのは有難かった。なによりアリサとすずかとした約束を反故にせず済む。

ここで自分の休息よりも、友達との約束を破る事を上位にするあたりに高町なのはが九歳にして『主人公』たる所以があるわけだが、そのことに気付いているのは恐らく『最

初の友達』を除けば誰もいないだろう。

尚なのは半分もジュエルシード捜索に参加しておらず、最近仕事も碌にしていな
いドウルクは、なのはを氣遣つて捜索を代わりにやっている——なんてことはな
く『ちよつくら現実^{リアル}の映画館行ってデッドプール見てくる』とか言つて行方を晦ませて
いた。

デッドプールはマーベルコミックのヒーローの一人だが、二年前に第二作が公開され
たスパイダーマンと違つて、映画化などしていなかつた筈である。ドウルクが一体ど
この映画館に行ったのかは謎だった。

ドウルクの事は気にしても仕方ない。それよりも今日の予定だ。

なのはがアリサとすずかとやつて来たのは近所のグラウンド。父の士郎がコーチ兼
オーナーをしているチーム翠屋JFCの試合があつて、その応援に来たのだ。

「頑張れ頑張れー！ みんなー！ がんばつてー！」

こういう時、ノリが良いアリサは率先して応援の声をあげる。

主観的にも客観的にも所謂「美少女」であるアリサの応援に、翠屋JFCのメンバー
の殆どは顔を赤くして奮起し、対戦チームは嫉妬の炎で燃え上がった。翠屋JFCの
キーパーのように大きなリアクションをしていない極一部は、恐らく既に彼女持ちのり
ア充だろう。

『これって、こっちの世界のスポーツなんだよね?』

ユーノが直接言葉を脳内へ届ける魔法、念話を使って話しかけてきた。

『ん? うん、そうだよ。サッカーっていうの。ボールを脚で蹴って、相手のゴールに入れたら1点。手を使つていいのは、ゴールの前にいる一人だけで』

『へー、面白そうだね』

なのはからすれば一般的スポーツであるサッカーだが、ユーノからすれば異世界のスポーツである。未知の競技に興味津々の様子だった。

『ユーノ君の世界には、こういうスポーツとかあるの?』

『あるよ』

『やつぱり空を飛び廻ったり、魔法で物を動かしたり?』

『物にもよるかなあ。中にはこの『サッカー』みたいに魔法を一切使わないものもあるよ。異世界人だからって誰もがリンカーコアを持っている訳じゃないしね。』

管理局:…次元世界の警察みたいな組織なんだけど。そのトップの一人もリンカーコアを持っていない人だし』

『へえ、そうなんだ』

異世界人は全員魔法使いだと思っていたので、地味に目から鱗な新事実だった。

よくよく考えれば魔法使いのいない地球で自分のように魔法の才能を持つ人間がい

るのである。その逆があるのも当たり前かもしれない。

『まあ僕は研究と発掘ばかりで、あんまりやってなかったんだけど』

『にやはは、私と一緒にだ。スポーツはちよつと苦手。ドウルークは野球が好きみたいだけどね』

『へ、へえ。そうなんだ……』

『うん。西鉄時代からのライオンズファンとか言ってた』

サッカーを知らないユーノが野球を知っている筈もなく、頭上にクエスチョンマークを浮かべていた。

なのはとユーノが念話で会話している間も試合は続く。翠屋JFCのキーパーがフラインプレーをして盛り上がったりなんやかんやして、試合終了のホイッスルが鳴った。

結果は2：0で翠屋JFCの勝利。勝敗を分けたのはやはりキーパーの差だろう。

それから祝勝会という事になり、流れでなのは達も翠屋までついてきたのだが、
「あれって……う？」

ほんの一瞬のことだった。

祝勝会が終わって解散する翠屋JFCのメンバーたちの一人、あのキーパーの少年が自分の鞆にジュエルシードらしき青い石を入れるところを目撃したのである。

きつと気のせいだろう。青いビー玉か何かを見間違ったのだ。そう思う一方で『もしかしたら』という疑念が消えない。

「さて、じゃあ私たちも解散?」

「ふえ?」

悩んでいるところにアリサの声が聞こえてきて、なのはは素っ頓狂な声をあげてしま
う。

「どうしたのよ、なのは。まさかまた私達と話してる時に変な妄想でもしていたんじゃないでしょうね」

「ち、違うよ! えーと、今日は二人とも午後は予定あるんだよね」

それからアリサは父と買い物へ、すずかは姉と出かけるため帰宅していった。

特に予定はないなのとしては、これから今日はゆっくりしたいところなのだが、やはり脳裏を過ぎるのはキーパーの少年のこと。

「やあ。今日は失礼したOLみたいなの顔かい?」

ポンと置かれた手に振り返る。

「ドウルーク? 映画は終わったの?」

「……」——嗚呼、最高の出来栄えだった。劇場から出る時は、この映画を見る為に生まれてきたんだと思ったねボカア! お前等読者も二次創作読破してる暇あるんなら

見ろよ、映画デッドプール。あ、これはお土産だ」

「なにこれ？」

「ガム」

「……………あ、ありがとう」

コンビニで売ってる普通のガムはお土産とは言わない、というツツコミが喉元まで出かかったが、ぎりぎりのところで呑み込む。

なにはともあれ自分の為を買ってきてくれたのだ。文句など筋違いだろう。

「で、そんな顔してたつてことは何かあったんだろう？」

ドウルークは服が汚れることも気にせず道端に座り込みながら缶ビールを開ける。人間として駄目過ぎる姿に、ご近所の奥様方がヒソヒソとこちらから目を背ける様にした。

なのはとしても翠屋の前でやられると迷惑なので、強引に場所を移してから説明する。ちなみに貰ったガムはコーラ味だった。

「ふーん。そのモブキャラ以上サブキャラ未満のキーパーの餓鬼がジュエルシードを持つてるかもしれないって」

「うん。……………だけど人をモブなんて酷い呼び方しないで。失礼なの」

ドウルークが電波発言するのは毎度の事なので気にしないが、人を侮辱するような発

言は見過ごせない。普段とは違う強い口調でなのは言った。

「モブはモブさ。死んだところで拍手喝采されることも全米がなくわけでもない。読者にとつても世界にとつても死んだところで大した影響のない人間だ。」

……ああ、ジョークジョーク。ボカア愛と平和をこよなく愛するナイスガイ。人間の命は地球より重いんです、つてね。全人類と全読者からアンチされようと気にしないけど、友達のなのはに嫌われるのは勘弁だ。だからそんな怒った顔やめて、ね?」

「本気で反省してる?」

「もち」

白い歯を輝かせながらグツと親指をたてるドウルーク。人を疑う事が得意ではないなのにも嘘と分かる白々しさだった。

だが反省しているという友達をこれ以上疑う事も出来ず、なのはは貰ったガムを噛みながら。

「それでどうしたらいいのか迷ってます」

『……………そんなことがあったのか。ならこんな風にじゃなくて、普通に僕に相談してくれば良かったのに』

「ごめんね。なのはの気のせいかもしれないから、ユーノ君には言い難くて。それでドウルークは…………」

「僕に任せろ」

いきなり立ち上がったドウルークはなのはに背を向けると何処かへ歩いていった。慌ててなのははドウルークを追う。ユーノもなのはが追うとそれに続いた。

「ちよつとドウルーク!?!」

『い、いきなりどうしたんだ?』

「僕にいい考えがあるツ!」

ユーノの問いにキリツという効果音が聞こえそうなキメ顔でドウルークは言った。

止める間もありはしない。ドウルークはぐんぐんと進んでいき、あのキーパーの少年を見つけてしまう。そしてドウルークが取り出したのは、背負えるほど細長いハンマーだった。

「じゃあ行ってくる」

「ちよ、ちよつと待って! なにをやる気なの?」

「大丈夫だ。僕は穴が三つある相手にしか興味はない。あ、これは性的な意味でね」

「そんな心配はしてないの!」

「左よーし、右よーし。通行人なーし、巡回中のサツなーし」

なのはの制止も聞かずドウルークは、通り魔そのものの動きでサッカー少年の背後まで忍び寄る。しかも素人のような挙動不審さで、玄人のように物音をたてないという地

味に高度な技を使いながら。

少年の背後に立ったドウルークはハンマーをバトンのように器用に回しながら、思いつきり脳天を殴りつけた。

『ちよつと、なにをやつてるんだい!? 非殺傷設定とはいえ!』

「察せよユーノ。読者は求めてるんだよ、金髪ロリっ娘を。一日一更新でもないのにあんまり序盤をぐだぐだ長くやつてると、下手したら読者が飽きて離れてくからね。こういう消化イベントはさつさと終わらせないと。」

また意味不明な説明をしながら、ごそごそと鞆を物色するドウルーク。傍から見ればその姿は完全に暴行障害及び強盗の現行犯だった。

「あつたぞ」

やがて目当てのものを見つけたドウルークは、ジュエルシードを無造作に掲げた。

だからといって手段が正当化されるわけではないが、取り敢えず無意味な暴行にならなかったのは不幸中の幸いである。

いつもなら早速封印魔法——と、いききたいところではあるが、なのにはやる事があつた。

「ユーノ君。回復魔法、教えて」

この日。なののは魔法のレパトリーが一つ増えた。

第6話 不法侵入は最低なの？

なのはの親友の一人である月村すずかの月村家は、海鳴市でも指折りの名士である。

比喩ぬきで森が丸々収まった広大な敷地面積に、古めかしくも気品ある屋敷、極め付きには屋敷で働くメイド達だ。もし事情を知らない者がここに迷い込めば、大正時代の華族の屋敷にタイムスリップしたかのような錯覚を覚えることだろう。

そしてそんな屋敷の塀の周囲をチョロチョロと動く怪しげな影が一つ。

宇宙を圧縮したかのような純黒の髪に趣味の悪い青いスーツ。言うまでもなくドウルークだった。

「ちよいウエイ。地の文だからって言っていーことと悪いことがあるぜ。僕が一時間かけてコーデイナートして、作者が五秒で設定を決めたスーツを悪く言うなよ」

ドウルークは狂人のように誰もいない方向にぶーたれながら、ピタリと屋敷の丁度裏側辺りで止まる。

わざとらしく上下左右、ついでにマンホールの中も確認。読者以外は誰も見ていないことを確認すると、その場で地面を蹴り跳躍した。

助走なし魔力なしで20mという有り得なさ過ぎる高度まで跳んだドウルークは、監

視カメラの死角となるほんの僅かな空間を擦り抜ける様にして屋敷へ侵入を果たす。

「今頃なのはは御屋敷でお友達と優雅なお茶会。なのはのお兄さまこと恭也つちは嫁な忍ちやまと逢引中。対する僕はお一人様。寂しくなんかないもーん。嫁なんかいなくたって僕にや右手の愛人と股間の息子がいつつもいるんだから。」

けどなのはつたら幼馴染みつぽく『ドウルークをお茶会に連れてって』って頼んだのに容赦なく駄目って拒否するし、すずかちゃんときたら視線すら合わせてくれないし。恭也つちとの扱いの違いを露骨に感じるね。流星は古くから存在する魔改造系主人公の一人KYOUYAだ」

ドウルークは不法侵入者だというのにまるで自分こそ屋敷の主だと主張するように堂々と、木々をかき分けて進んでいく。

平然とやってはいるが、無数に設置されたセキュリティの死角を、一切の魔法を使わず尚且つ止まらず進むというのは、とんでもなく難しいことだ。というより予めどんなセキュリティが仕掛けられているか完全に記憶していない限り不可能だろう。

そんな不可能をドウルークはどうして出来るかと言われればこう答えるしかないだろう。知らん、と。

「ま、最近は碌に見ないんだけどね。魔改造系。一時期はあつちこつちでスパシンにU—1にSHIKIにSHIROUにYOKOSHIMAにとあったのに。」

昔は食傷気味だったけど、なくなつて改めて思う寂しさ。今はHACHIMANばつかだもんね。画面の前の読者もそう思うだろう？

ん？ 思うつて？ よしきた言質とつたからなおい。じゃあ今直ぐKYOA主人公でss一本書け。

自信がない？ イツヒヒヒヒヒ。大丈夫だ、僕を信じろ。今時KYOA物なんて古すぎて逆に新鮮だから寧ろ食いつく。あとはそこそこの文章力と珍しい設定スバイスをちよちよいと加えれば日刊入りは楽勝だつて。だからほら。僕の騙しに騙されてみろつて」
ある程度屋敷近くまで来たドールークは、そこでゆっくり腰を下ろして木にもたれかかる。

事が発生して歴史的瞬間到来まで後一時間弱。それまでやることなく暇だった。ドールークは髑髏柄のネクタイを直しながら、懐からパンの耳が入ったビニール袋を取り出す。

公園で鳩へ餌をやるのが趣味の森崎重三（81歳）から分けて貰った本日の朝食兼昼食兼夕食である。

「今頃なのは優雅に茶会でクッキーでも摘まんてるんだらうな。こつそり幾つか持ちかえつてくるよう頼んだが、はてさて戦果は如何程か。

だいたい記念すべきリリカルなのはヒロイン人気投票第一位僕調べのフェイトそん

出るっていうのに、主人公を置き去りとかどういふことなんだろうねえ。

もしかしてボカア踏み台主人公ってやつなのかい？　なのはにとつてボカア当て馬で、本命がいるって？　ならそうだと云つてくれたら良かったのに。背中に瞬間接着剤べったり塗つとくから。転ぶ時は諸共、あの世への旅路は道連れってね」

読者にとつて非常に残念なことだが、この二次創作内において原作キャラ以外のオリジナルキャラクターは主人公であるドウルークだけだ。

踏み台主人公もいなければ、オリジナルヒロインもいないし、原作キャラ憑依系主人公もいないのであしからず。

「そうそう。僕は踏み台じゃないぜ。だつて本当の主人公なら『踏み台』なんか使わずに、自分の足でどこへでも飛んでいくものな。なあ、なのは」

ドウルークの座り込んでいる場所から程近い所で強力な魔力反応が発生する。

魔法文明のない地球において魔力反応がするということは、即ちジュエルシードの活性化現象に他ならない。

ドウルークはビニール袋にある残りのパンの耳を、胃の中へと流し込む。ビニール袋は最低男らしく不法投棄だ。

「さーて、なのはと合流するとしようか」

ドウルークは手術に臨む執刀医のように白手袋を嵌めると、親愛なる友達の来る方向

へと歩いて行つた。

茶会で談笑しながら、頭の半分でドウルークのことを考えていたのはだったが、高い魔力資質に裏打ちされた感応能力は、ジュエルシードの発動を素早く認識した。

反応はかなりの近くから。恐らくはこの庭の中だろう。

ジュエルシードの危険性はなのはこの短期間でよく分かっている。下手すれば友達の家が吹っ飛びかねない事態に、なのはとユーノは急いでジュエルシードの反応がした場所へ走つた。

「なっ——!?!」

だが向かつた先でなのはが見たものは、色んな意味で常軌を逸した光景だった。

「ヒヤッホウ!! ここがええんやろく、ここがええんやろく!」

先ず目に移つたのは恐竜のようなビッグサイズの猫。こちらはまだいい。きつと猫の『大きくなりたい』という願いを、願望を実現する効果のあるジュエルシードがアツパー気味に叶えたのだろう。

問題なのはその猫相手にしがみ付いて、無駄に色っぽい美声で悶えている最低の不審者だった。

「……………なにやってるの、ドウルーク」

「決まってるだろう」

陶酔顔から一転、無駄にシリアスな顔付きになるドウルーク。

「猫と遊んでいたんだ」

「寧ろ猫に遊ばれてたんじゃなの？」

深い溜息を吐きだしながらなのは脱力する。さっきまで『皆を護らないと！』と悲壮な覚悟をしていたのが馬鹿みたいだ。

巨大化した猫とドウルークというどう考えても雰囲気ぶち壊しの組み合わせに、なのはの決意は明後日の方向へ飛んで行ってしまった。

「なのは、遊んでないで封印を！　今は猫が大きくなってただけだけど、もしかしたら暴走する可能性もあるんだから」

「そ、そうだねー」

遊んでいたのは自分じゃない、と言いたいなのはだがグツと堪える。

幾ら大人しい猫が大きくなっただけとはいえ、その体積は地球上のどんな生物よりも上だ。もしも猫のように飛んだり跳ねたりされたら、それだけで大惨事になる可能性がある。

「気をつけろよ、なのは」

「大丈夫だよ。これまでもちゃんとやれてきたんだから。だよね、レイジング・ハート

「？」

『ALL right. My master』

心配するように言うドウルークになのははそう応えたのだが、ドウルークは違う違うと手を振る。

「封印するのはいいけど、やり過ぎて射殺とかするなよ？ 人間ならいくら殺そうと問題ないけど、動物殺すとフィクションでも動物愛護団体が五月蠅いんだよ」

「じゃ、射殺なんてしないの！」

「言ったな？ なら今にも子供が猛獣に殺されそうになっていて手元にあるのが実銃だけだったとしても、絶対に撃つたりするんじゃないぞ。ちゃんと時間をかけて麻醉銃持ってこい」

「分かったからそこ退いて！ 封印できない！」

邪魔なドウルークを怒って退かすと、なのははレイジングハートを猫へ向ける。

幸いジュエルシールドは発動したものの落ち着いていた。これなら特に問題なく封印できるだろう。

「あ、それフラグ」

ドウルークがそう言うのと、空から雷の矢が降り注ぐのは同時のことだった。

突然の電撃に猫が呻く。

「い、これは？」

落雷なはずがない。天気予報でも今日の天気は晴れだったし、その予報が正解であることは現在進行形で証明中だ。

となればこの電撃の正体として思い付くのは一つだけ。自分やユーノが使うものと
同じ魔法。

そしてなのはが頭上を見上げると、予想を裏付けるように一人の少女が空中に佇んでいた。

純金を溶かしこんだような深みと、雷のような明るさのある綺麗な金色の髪。瞳はルビーの輝きより見惚れてしまいそうな赤だった。これまで見た誰よりも何よりも美しい少女は、さながら神話の彫刻家が魂をかけて作り上げた作品のように幻想的である。

けれど何故だろうか。なのはにはその瞳が悲しみに揺れているような気がした。

「これぞ『運命』との邂逅だ。というわけで今日の投稿分はこのあたりで終了。次回の最低不審者ドゥルーク第7話はいよいよフェイトとの初バトル。物語を盛り上げるの
はやっぱりヒロインとライバルだね」

第7話 キング・クリムゾンは最低なの！

『奥さまの名前はなのは。そして旦那様の名前はフェイト。ごく普通の二人は、ごく普通の恋をし、ごく普通の結婚をしました。でもただ一つ違っていたのは、奥さまは魔法少女だったのです。なのフェイ展開——キマシタワー！』

開始早々ドウルークは一話前、作中時系列的にはほんの数秒前までのシリアスな雰囲気、敵ではなく味方であるはずの友達に出鼻を挫かれる形になったのは、若干の怒りを放ちながら口を開く。

「いきなり何を言ってるの？」

「なにつて、オープニングナレーションだよ。ワンピースでいうと『富、名声、力』で始まるアレだよ。折角ライバル登場したんだからちゃんと原作リスペクトして魔法少女っぽいナレーション挟んだんだ。気に入ったかい？」

「気に入る要素がまったくないの！あとなんで私がいきなりあの子と結婚してるのになってるの！女の子同士で結婚なんてできるはずないよ！」

「それは早計だぜ？オランダじゃ2001年の段階で同性結婚法が施行されている。

同性だから結婚できないなんてのは国際的には古い時代が訪れているのさ」

「うっ……」

極真つ当なツツコミをしたら、ドウルークらしからぬ極真つ当な返しがきた。

確かにドウルークの言う通りである。同性愛についての理解が進んだ現代社会において、同性同士の結婚はタブーではなくなってきた。寧ろ場所によってはタブーとすることが逆に非難されることもあるだろう。だが、

「け、けど! 私、9歳なんだからまだお嫁さんにはなれないよ? それにまだ好きな人だっっていないのに……」

「オーライ。分かった、じゃあさっきのナレーションなし。リトライといこう」

ドウルークはパンツと手を叩くと、何処からともなくマイクを取り出す。

『人は何かの犠牲なしに何も得ることはできない。』

お金を借りるには同等以上の利子が必要になる。

それが、闇金における不等価交換の原則だ。

その頃僕らは、それが金融の真実だと信じていた。——魔法闇金ウシジマくん、

始まります』

「魔法闇金ってなんなの?! ウシジマくんってなに?!」

「闇金ウシジマくんとリリカルなのはクロスさだよ。ウシジマくんの二次創作なん

て全然ないから、実際投稿すればたぶんそここの人気は獲得できるよ。クロスにしたのは読者が食いつきやすいようにさ。これならウシジマくん知らない読者でも、リリカルなのは知ってるからって見るかもだろ?、

まあこういうキワモノ s s は一時的に物珍しきで人気出ても、大抵は風呂敷畳むまで考えてない見切り発車だから、十五話あたりで更新間隔が空いていつてエターになるんだけどね。書き始める前には必ずプロットは用意しましょうってな」

地の文として言わせて貰えば……序盤から無茶苦茶な行動とりまくって、こちらがせつせと作ったプロットを壊しまくってるお前が言うな、そもそもこの s sこそがキワモノの権化だ。ずれにずれまくった流れを修正するのに一体こつちがどれだけ苦労していると思ってる。

具体的には今現在だ。下らない雑談なんかやってないで目の前の敵に集中しろ。折角のフェイトとのファーストコンタクトなのに、メインのフェイトが木の上に立ったまま呆然としているじゃないか。

「だってさ、なのは」

「へ?」

「いいのかい、僕と喋ってばっかで。自分放置して意味わからないこと喋りまくってるから、折角のヒロインが戸惑ってるぜ」

「——あ」

フェイト・テスタロッサの困惑の視線が痛いほどなのはに突き刺さる。

「同系の魔導師……ロストロギアの探索者、それにバルディツシユと同じインテリジェントデバイス……けど、変な子」

「初対面の子に変な子呼ばわりされた!?!」

最後にボソツと付け加えられた『変な子』という発言に、なのはは嘗てない精神的ダメージを負う。しかも味方であるはずのユーノにまで『まあ否定できないかなあ』などと言っていたことが更に追加ダメージ。

この追加精神攻撃にバーサーカーソウル喰らったインセクター羽蛾のように崩れ落ちそうになるが、そこは不屈の心で堪える。

『Scythe form Setup.』

フェイトの持っていたデバイス——バルディツシユの核である黄色い宝石部分が光り、女性的なレイジングハートとは違う男性的な機械音を発した。

機械黒杖が変形し、鎌のように黄色い魔力刃が生えてくる。黒いバリアジャケットに身を包み、こがねいろ黄金色の鎌を構える姿はさながら死神のようであった。

「申し訳ないけど頂いていきます」

「あっ!」

魔力による高速移動で接近してきたフェイトが振り下ろす鎌を、なのはは咄嗟の判断で飛行魔法を發動させ躲した。

『Arc Saber.』

無論同じ魔導師相手に空へ飛んだくらいで逃げられる筈がない。フェイトは魔力刃をブーベランのように放ち追撃してきた。

なのはは障壁を張って防御するも、相手はそうすることも織り込み済みである。防御して動きを止めている間に、フェイトもまた飛行魔法を使い距離を詰めてきた。

「おっと。僕を忘れてもらっちゃ困るぜ」

ジェットパックを背負ったドウルークがなのはの隣まで上昇してきて、ガトリングガンをぶっ放した。

フェイトはまるで動じず素早い動きで弾を回避していくが、取り敢えずなのはからは離すことには成功した。

「ふーっ。どうよ、このナイスアシスト。読者もなのはも見ててくれたかい？ あ、読者は読んでくれてたかいの方が正解だったね」

「あ、ありがとうなの」

「……さつきから何もない場所に向かって……誰と喋っているの……念話？」

「良い質問だ。僕は三歳の頃、強盗に頭を殴られたショックで見えちゃいけないものが

認識できるようになったんだ」

「なんだか前と言ってること違うような」

「設定変わったんだよ。言わせんな恥ずかしい」

「……ともかく、ジュエルシードは頂いていきます」

ガトリングガンによる攻撃がフェイトの危険認識を一段階上へと引き上げたのか、かなりの魔力を注ぎ込むと二十の魔力刃を形成する。

不味い、と思った時には遅い。フェイトがバルディッシュを振り下ろすと魔力刃は猟犬のように襲い掛かってくる。

なのははレイジングハートのサポートもあって、どうにか地上に逃れることが出来たが、ドウルークの方はそうはいかなかった。魔力刃がドウルークを貫通する。

「アウチツッ！」

間抜けな悲鳴をあげたドウルークは『あくれく』と言いながら地上へ落ちていった。ぐしゃ、と骨がひしゃげる嫌な音が響く。

「ドウルーク死すとも作品は終わらず……がくつ」

「どう、ドウルーク……」

急いでなのはは倒れたドウルークに駆け寄る。

普通の人間なら死んでもおかしくない高度から落下したのだが、そこは存在が非常識

のドウルークだ。最期の台詞みたいなものを残してはいたが別に死んではいなかった。「いてて。不味いなあ、首の骨折れちゃってるよこれえ。首が折れ曲がり過ぎて一周回って元通りだ」

「だ、大丈夫なの!?!」

「治るのにあんまり長くかかると原作終わっちゃうから、全治十日くらいにしておこう。作者のやつ、これでテンプレなイベントをスキップする気だな。姑息な手を……」

「と、十日でなんで治るの?」

程度にもよるがドウルークほどの骨折だと、十日で完治させるのはどうやったって無理だ。ブラックジャックがいたって駄目だろう。

そもそも首の骨が360度回転してるのに、平然と生きているのが生物学的におかしかった。

フェイトはこちらを暫く見ていたが、やがてジュエルシードを回収するべく猫が倒れている方へ飛んでいく。

「待つて!」

『Divine buster Stand by.』

デバイスの杖先へ向けると、フェイトも振り返りバルディッシュをなのはに照準した。

「どうして……どうしてこんなことをするの?」

「答えてもたぶん……意味がない」

『Photon lancer Get set.』

互いのデバイスが発動させようとしているのは共に砲撃魔法。なのはの強い視線と、フェイトの薄い視線が交錯する。二人の少女は杖を向けあつたまま膠着状態になった。

膠着を破つたのは、猫の鳴き声。

電撃で気絶していた猫が目を覚ましたのだろう。起き上がった猫は『にゃ〜ご』と鳴きながら走り去っていった。そこで猫に気をとられて視線を逸らしてしまったことが、なのはにとつて致命的な隙となる。

「…………ごめんね」

眩かれる言葉。放たれる砲撃魔法。

気絶する直前、なのはが最後に見たのはジュエルシードを封印して飛び去る少女の背だった。

第8話 最低なテンプレートなの？

ドウルークが首の骨を折る大怪我をして戦線離脱する事になった、フェイトとのファーストコンタクトから早十日。

主人公が戦線離脱したからといって時間が止まる訳ではない。その間もなのはとフェイトとのジュエルシードを巡る争いは続いた。

一度目は連休を利用しての温泉旅行先で、二度目は街中で。二人の若き魔導師は二回に渡って激突した。

話し合いを求めるなのに対して、悲壮な覚悟でジュエルシードを手に入れようとするフェイト。だが二度とも戦いにおいて優勢だったのはフェイトだった。

それは決してなのはがフェイトに劣っていた訳ではない。得意とする分野こそ違えど、才能において同等か寧ろなのはが若干勝っていた程であろう。だがなのはにはフェイトと比べ魔法に触れた年月に差があった。

如何な天才といえど『経験』だけはそう簡単に得られるものではない。こればかりは熟した場数が物を言う。事実として歴史上の多くの天才も、若かりし頃は凡人と同じように失敗していたものだ。

故に驚嘆すべきなのだろう。経験値に勝る相手に一歩も退かずに喰らいついでいたなののは奮闘に。

ファーストコンタクトでの戦いはもはや『戦闘』という形にすらなっていないかったので除外するにしても、一度目は敗れはしたものの善戦し、二度目では拮抗すらしてみせた。

これは異常な成長速度だ。才能がどうだとか、魔力量がどうだとかいう問題で片づけられる問題ではない。困難があろうと折れない不屈の精神力、背負った責任を果たそうとする強い覚悟。大人ですら中々持ちえないそれを、若干九歳にしてなのは己の内に芽吹かせ始めているのだ。それはある意味において魔法の才能などよりよっぽど凄まじいことだろう。

だが年齢に似つかわしくない精神力があらうと、やはりまだ小学三年生。肉体と精神両方の疲労で休みたくなる時もある。

そういう時、なのは自然とある場所へ行く。

自分の家の近所にある公園にあるベンチ。そこは高町なのはが、人生最初で最低の友達と初めて会った場所だ。

そしてベンチに腰掛けて少しすると、まるで見計らったようなタイミングで声がかか

「やあ、お嬢ちゃん。大学時代から付き合ってた彼氏に別れ話を切り出されたＯＬみたいな顔して何やってるんだい？」

この四年間で誰よりも何よりも聞きなれた声。顔を上げれば、そこには誰よりも何よりも見知った顔があった。

「ドウルーク！」

「ああそうだとも。君の友達ドウルークだ。久しぶり」

「怪我は大丈夫なの？」

見たところ包帯も何もしていないで至って健常そうだが、あれだけの怪我が十日足らずで治るとは到底思えない。

ドウルークはとっておきの手品を披露するマジシャンのようにニヤリと笑うと、

「良い質問だ」

ワイシャツの第一ボタンを外して首筋を晒すドウルーク。すると驚くべきことに十日前は360度回転していた首が、なんと更に720度回転していた。

「つて治るどころか悪化してるよー！」

「あーら、僕としたことが振じる方向間違っちゃったよ。よくあるよね、ネジ締める時に反対方向に締めちゃって逆に緩めちゃうつて。

そういう事になったら慌てず冷静に、思いつきつて一回とつちやっしてから改めて締め

ると上手くいくんだよ。こんな風に」

ブチっという血管と肉が千切れる音がする。ドウルークは微笑みながら、自分の首を捻子切ってしまった。

ホラー映画に出てくるグロテスクなシーンとは比べものにならないリアルなグロさに、なのはは悲鳴をあげそうになる。だが寸でのところでドウルークの体が手で口を塞いだ。

「落ち着いて。こんなものはコンビニで買った接着剤をちよちよいと首に塗りたくってから……はい、くつついた！ これにて元通り」

「……もう、どう反応すればいいのか分からないよ」

なのはは頭を抱えるが、それで正常だ。

首を自ら捻子切り、コンビニの接着剤で自ら首を繋ぎ合わせ元通りになる『人間』など存在が有り得ない。

「はあ。また始まつちやったのか」

ユーノはフェレット顔に諦めたような達観を張り付けて嘆息した。

「ところで話を戻すけど何があったんだい？ 浮かない顔してさ。そんな幸薄い面していると本当に幸運が逃げるぜ」

「……答えなくても、ドウルークは分かるんでしょ」

「うん。友達のアリサと喧嘩したんだろう？ 隠し事してるんじゃないかって咎められて喧嘩に発展。よくあるパターンだよ。ただ喧嘩といってもファーストコンタクトの時と違って、実際隠し事している後ろめたさがあったから一方的に怒られっぱなしだったと」

「やっぱり、ドウルークはなんでも知ってるんだね。私のこと」

いい加減なのはもドウルークと出会って長い。現実的に考えて知りえる筈のない情報を何故か知っていることにも一々驚きはしなかった。

きつとドウルークは『高町なのは』の事を高町なのは以上に知り尽くしているのだろう。

「〃良い〃友達じゃないか。滅多にいないぜ、そんな友達」

「ドウルーク？」

驚いた。ナルシストなドウルークは自分を褒めることはあっても、他人を褒めることは滅多にない。褒めているようでも、実際には茶化しているだけだったり遠まわしに貶しているというパターンが殆どだ。

しかし今ドウルークはストレートに称賛したのである。アリサ・バニングスというなのはの友達を。

「良い友達っていうのは友達が過酷な道へ進もうとしたら心配するか背中を押すかする

ものだし、悪いことしたら嫌われることも厭わず叱ってくれるものだ。正しくなのは心配して怒ったアリサちゃんだよ。

親だってそうだろう？ 良い親は子供が悪さしたら怒るものだけど、駄目な親は子供が悪さしたら、それを悪いことだと言う社会に対して怒る。

なんでもかんでも友達のことを全肯定して受け入れてくれるのは良い友達じゃない。『都合の良い友達』って言うんだ。

だから心配することはない。アリサちゃんとの仲直りならいずれ出来るさ。だってアリサちゃんは、なのはを嫌って怒ったんじゃないやなくて、なのはが好きだから怒ったんだもの」

「……………うん、そうだよね」

胸のつつかえがとれたわけではない。以前として友達に隠し事をしている、という後ろめたさはなのはの心に押し掛かっている。けれど少しだけ重荷が軽くなったような気がした。

「ありがとう。ドウルークっていつも最低さんだけど、たまにお父さんみたい」

「HHHHHHHHHHH！ 生憎とパパさんになるほどの金はないね。むしろ早く大人になって僕のママになってくれよ」

「……………それはちよっと」

十年後。公務員になった自分が、無職のドウルークを養っている姿を想像してしま
う。

こんな事になった未来は自分にとって良くないものだと分かっているのだが、心の片
隅で『これはこれでいいかも』なんて思ってしまう自分がいた。

きつと微温湯に浸かっている気分なのだろう。他人からは奇異に見られるかもしれ
ないが、自分が明確に誰かに必要とされ続けているという実感は心地よいのだ。

(駄目なの、こんなこと考えてちゃ！ 大人になったらちゃん自分の力で生きていか
ないと。それにきつとこんな浮ついた気持ちじゃ)

あの悲しげな目をした少女、フェイトと正面から向き合うことが出来ない。

ジュエルシードを巡る争いの中で出会ったフェイト・テストロツサという少女。彼女
と話をして、できれば友達になりたい。

最初の出会いこそ最悪だったけれど、いつのまにかフェイト・テストロツサはなのは
の中でジュエルシードよりも大きな戦う理由になりつつあった。

「それでいいさ。僕としてはジェラシーだけだね。さあ読者のヘイトを集める原作キャ
ラへの説教タイムは切り上げよう。そんなことよりお待ちかねのバトルの時間だぜ」

「――！」
ドウルークがウインクすると、レイジングハートがジュエルシードの発動反応を

キャッチする。

既にジュエルシードとは異なる二つの魔力反応が現場に向かっていた。きっとフェイトと、その使い魔であるアルフだろう。

「行こう、ユーノ君！」

レイジングハートを素早くセットアップ。バリアジャケット姿になったなのは、すっかり馴れ切った飛行魔法で現場へ急いだ。

ドウルークも青狸から借りたと嘯いたタケコプターを頭に装着して、それに続く。

そして現場に到着したのが見たのは、ジュエルシードの影響を受けて変容した樹木のモンスターと、それを封印しようとするフェイトとアルフ。

「フェイトちゃん！」

「……またあの子。アルフ、少しだけジュエルシードを抑えてて」

「お安い御用だよ。あんな何にも知らない小娘なんて軽く捻ってやりな」

アルフのエールを受けたが、言う通りに軽く捻れる相手ではないことはフェイトが一番良く知っていた。

ある意味誰よりも近い場所でののは急成長を目の当たりにしたフェイトは、現在の高町なのはの実力を最も正確に把握している。

ジュエルシード封印を後回しにして迎撃を優先したのは、封印しながら相手取れるほ

ど半端な敵ではないからだ。

なのもジュエルシードを封印するため、そしてそれ以上にフェイト・テストロッサと「話」をするためには、フェイトと戦って倒す必要がある。

白と黒。奇しくも対照的なバリアジャケットに身を包む少女は、同時に宙を舞い。

「ストップだ。時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。ここでの戦闘は危険過ぎる」

「男の、子の……魔法使い？」

「管理局の、執務官……っ！」

なのもフェイトも、アルフもユーノも。この場にいる全ての人間が三人目の魔導師に動きを止めた。

「原作時空のなのは婿きたあああああああああああああああ!!!! イイイイイイ

イイイイイイイイイイイイヒヤツホウ!!

クロなの? クロフェイ? クロはや? 僕は全てのカップリングを差別しないぜ。

全て平等に価値がある! けどホモ時空は勘弁な!」

空気の読めない若干一名がフィーバーしているのを除けば、だが。

執務官。鬼のような倍率、筆記試験、実技試験をパスして初めて資格取得できる管理局の役職だ。その難易度の高さから四十代、五十代のベテラン局員が受験する事も珍し

くない。

最低でも三尉相当の権限を持つ彼等は、例外なく文武両道のエキスパートであり、管理局における栄達が約束されたエリートといふべき存在だ。若干十四歳にして執務官の任にあるクロノ・ハラオウンがどれだけの秀才なのが分かるうというものである。

そんなクロノ・ハラオウンの介入によって、現場は完全に支配されていた。

なのは状況が掴めずオロオロするだけだが、フェイトの方は虎視眈々と隙を伺いながら動けずにいた。

何故かなど分かりきっている。隙がまったくないのだ。

もし不穏な動きをすれば、即座にデバイスを粉碎され無力化される。なのはと違い、近に自分を遙かに上回る魔導師母がいたフェイトは、彼我の戦力差を痛いほど理解できずじまつていた。

「第8話はクロノ祭りだ！ わっしょい！ わっしょい！ わっしょい！」

「まずは2人とも武器を引くんだ」

頭の中でお祭りしてる不審者を完全スルーして、若き執務官が警告する。

管理局のことを知らないのは、管理局法を犯している犯罪者であるという認識のあるフェイトすらも。クロノの静かなプレッシャーに圧されて指示に従ってしまう。

「クロなの、なのフェイトどちらも捨て難い。けど僕的にはクロノ、なのは、フェイトの三

人によるトライアングラーというの悪くないと愚考するよ。ほら今リアルで放送してるマクロスみたきさ。

といつても僕は女二人男一人の初代とFタイプより、男二人女一人のプラスと7風のが好きなんだけどね。ちなみに7はガムリン派かな。バサラは花束の少女一択。読者はお勧めのカップリングとかあるかい？」

本当に少し黙っててくれないかな、この男。

不審者が不審な言動をしている間にも、未来の管理局の星であるクロノは真面目に自らの任務をこなしていく。なのはとフェイトを地上へ降ろした。局員として職務質問的なものをするためである。

「このまま戦闘行為を続けるなら——」

相手が魔力量だけなら自分をも凌駕する魔導師ということもあって、クロノは心中に警戒心を秘めながら威圧的な口調で言った。

それがいけなかったのかもしれない。なのはとフェイトという二人の魔導師にクロノの意識が傾いた瞬間を、野生の本能で逸早く認識したアルフはオレンジ色の魔力弾を飛ばしたのだ。

「自分だけならば回避は容易い。けれど今クロノの背にはなのはがいた。反射的にクロノは障壁を展開して魔力弾を弾く。」

だがアルフとてこの程度の攻撃で執務官をやるなんて思っていない。これはあくまで牽制だ。

「フェイト、撤退するよ！ 離れて！」

一瞬フェイトの視線がジュエルシードへ向けられる。しかし管理局の執務官と正面からやり合つてジュエルシードを回収するのは難しい。それどころか下手したら捕縛されてしまうだろう。

そう判断したフェイトはジュエルシードへの未練を断ち切り撤退する。だがクロノも見逃してやるくらいなら態々ここまで出張つて来てなどいない。

自身のデバイスであるS2Uを照準。だが砲撃魔法を放つ寸前、

「やめて、撃たないでえ！」

「——！」

背後からの悲痛な叫びが発射を躊躇わせる。その間にフェイトとアルフの姿が物陰に消えるのを見て、クロノは『逃げられた』ことを悟った。

らしからぬ失敗にクロノは僅かに気を落としながらも仕事の方は緩めない。放置されていたジュエルシードの封印を手早く済ませると、なのは達に向き直る。

「さて、それじゃ」

『お疲れさま、クロノ執務官』

クロノが何か言おうとしたところで、丁度よく空間にモニターが浮かび上がる。

モニターの奥に映っているのはリンディ・ハラオウン。緑色の髪が特徴の女性で、ファミリーネームが示す通りクロノの母親だ。

「……なあ、なのは。めっちゃ若く見えるけど、あの人。実は〇〇才なんだぜ？」

「そ、そうなの？ てつきり二十代後半くらいかなあ〜と思ってただけど」

「天然で若作りなのもあるけど、半分は化粧だね。スツピンで別人になるタイプとみた」
「そこ。何をコソコソと喋っているんだ？」

「ご、ごめんなさい！ それで、なんの話でしたっけ？」

「はあ。聞いていなかったのか。母さ……艦長が事情を聴きたいから、アースラに来て欲しいという話だったんだが……構わないか？」

「は、はい！ 全然大丈夫です！」

「ああ、未亡人の艶めかしい視線が僕を待っている！」

次元世界のお巡りさん相手にもドウルークの最低発言は健在だった。なのはは友達としての義務で、隣の変態に鳩尾にグーパーパンチを入れておく。

これにはクロノもさつきまでの生真面目さも剥がれ落ちて若干引き気味だった。

「なあ、君。これは第九十七管理外世界の独自文化なのか？」

「……………合わせて下さい。僕は慣れました」

クロノの問いかけに、ユーノは親の介護に疲れ切った人のように言った。

「おい不味いぞ。どうやら君のエキセントリックな言動のせいで地球人全体が勘違いされつつあるよ」

「ドウルークのせいだよね!？」

なのはの悲痛な叫びが一带に響き渡った。

そんなこんなでクロノの転移魔法でアースラに招かれたなのは達。

次元航空艦という如何にもな名前は伊達ではなく、SF映画から飛び出してきたような宇宙戦艦チックな艦内に理系のなのはは興味津々だった。

途中ユーノが変身解除したことで、フェレット人間ではなくフェレットに変身した人間だったことが明らかになるというハプニングはあったが割愛する。

クロノの案内で連れてこられたのは艦長室。こんなSFチックな戦艦の艦長室なのだから、さぞ凄い部屋なのだろう。空間にモニターが立体映像として浮かび上がるなど当たり前、もしかしたらロボットでもいるのかもしれない。

「艦長、来てもらいました」

だがクロノの一声を合図に扉が開いた途端、なのはは自分の想像が正しく妄想でしかなかったかと思いきや知らされた。

「ワオ。ジャパニーズカルチャーは海どころか次元を超えてたんだね」
今回ばかりはドウルークの軽口にも突っ込めない。

和風情緒溢れる畳に、並べられた盆栽、置かれた羊羹に粗茶。室内に設置された獅子脅しが、間違った日本感をもった外国人のセンスを絶妙なまでに演出していた。

SF映画から飛び出してきたような、というのは訂正するしかないだろう。

宇宙戦艦の艦長室をなんちゃって和室にするなんて暴挙、Z級の糞映画しかやらないだろう。或は一周回って歴史に残る超大作か。

ともあれSF風な戦艦に対する感動はなのの中から消し飛び、ある程度の心の余裕が戻ってきた。

もしこの和室の狙いが日本人のなのには対する気遣いだったとするならば、一周回って目的は果たされたことになる。リンデイ・ハラオウン、恐るべしだ。

「お疲れ様。どうぞどうぞ。楽にして」

リンデイは歴戦の艦長らしからぬふわつとした、保母さんのように柔らかな笑顔で座るよう促した。

タイプこそ違えど自分の母親のような雰囲気、なのには少しだけ安心して促された場所に座る。ドウルークの方は我慢せずとばかりに寝転がっていたが。

話し合いで最初に口を開いたのはユーノ。ユーノはジュエルシードというロストロ

ギアの危険性と、それから自分がその発掘者で、移送途中に事故にあったことなどを順を追って説明していった。

「そうですか。あのロストロギア、ジュエル・シードを発掘したのは貴方だったんですね」

「はい。それで、僕が回収しようとして……」

「その考えは立派だわ」

「だけど、同時に無謀でもある」

リンディはユーノの責任感を労わるように褒めたが、逆にクロノは棘のある口調で答えた。

ユーノは何も言い返せない。責任ある行動といえれば聞こえは良いが、ユーノがこの地球に来てやったことなど細やかなものだ。ジュエルシード一つ封印するのにさえ手間取り、素質ある現地人に助けられる始末。フェイトという敵対者がいながらジュエルシードを回収してこれたのは、『高町なのは』という少女がいたからこそなのだ。

これはIFだが、もしも高町なのはという金の卵が海鳴市に住んでいなかった場合、今頃ユーノは毛むくじやらの化物にやられて死んでいただろう。

そこからリンディは魔法文明に詳しくないのはへロストロギアの説明という前置きを挟んでから、本題を切り出す。

「これよりロストロギア、ジュエル・シードの回収については、時空管理局が全権を持ちます」

「え……？」

「ま、そうくるだろうね」

母親のような柔らかい雰囲気とは打って変わって、リンディは高官らしい強い口調で宣言するように言う。

なのはとユーノは啞然としていたが、ドウルークは呑気にコミックなど読みながら、リンディの決定を受け入れていた。

「君達は今回の事は忘れて、其々の世界に戻って元通りに暮らすといい」

「でも、そんな」

「次元干渉に関わる事件だ。民間人に介入してもらうレベルの話じゃない」

冷たく突き放すクロノだったが、その裏には民間人であるのはを氣遣う暖かさがあつた。

理屈ならリンディとクロノが正しいのだろう。一介の温泉若女将やら記者やらが独自に捜査して、殺人事件を解決なんてことが許されるのは火曜サスペンスだけだ。殺人事件は警察の、そしてロストロギアへの対処は時空管理局の仕事。民間人の、それも管理外世界の住人であるなのはやるべき事ではない。

そう、理屈ならそうなのだ。

九歳とは思えぬほど大人びているなのは、そういう大人の理屈が正しいのだと良く分かつている。

だがけれど、〃理屈〃は分かっているても、〃感情〃のほうに分からない。

「まあ、急に言われても気持ちの整理がつかないでしょう。今夜一晩ゆっくり考えて二人で話し合つて、それからゆっくり話をしましょう？」

労わるようなリンデイの提案。なのはは頼るような目でドウルークへ視線を向ける。

「管理局様が自分でやると仰つているんだ。好きに任せればいいさ。僕は百万貰えればOKだしね」

「で、でも」

もしこれがジュエルシードの問題だけなら、まだ納得して引けたかもしれない。自分より管理局の方が上手くやれるからと。

だが自分はまだフェイト・テストロツサとしっかり話ができているのだ。これは上手くやれるだとかやれないだとかの問題ではない。〃自分〃がフェイトと話をするかしないかという問題だ。他人任せには出来ない。

「なんだ、表に出ささないだけで決まってるじゃないか」

ドウルークはニヤリと笑う。

「だったら思ったことをやればいいさ。ウジウジ悩んでるだけな展開はU A 数に響くかな。」

火曜サスペンス？ 大いに上等。やってやればいい。事実は小説より奇なりってね。民間の写真週刊誌記者が警察より先に犯人に辿り着いたって話は現実にあるんだ」

高町なのはの腹は決まった。

「あ、あの！」

この日、高町なのはが時空管理局に協力することが正式に決まった。

第9話 本当を知るためのトビラなの？

「ハアイ。なのはの最初の友達にして皆の友達ドウルークだよ。今日も元気に『最低不審者ドウルーク』第9話をやっていこー！ ……………と、言いたいの山々なんだけどさー」

前半のハイテンションが嘘のように、リストラを宣告されたサラリーマンのように肩を落とすドウルーク。

お昼時は職員で大いに賑わう次元航空艦アースラの食堂も、早朝4時という時刻のせいか人影はまったくなかった。食堂を切り盛りする食堂名物「食堂のおばちゃん」すらいない全くの無人である。

「今日でなのはがアースラに協力を決めてから早十三日。勘の良い……というか重度のリリカルなのはファンのは読者なら気付いただろう。そう、海上決戦もアルフ再会イベントも全部終わっちゃってるんだよ！ 臨海公園での最後の一騎打ち直前だよ！

おいこらどうなってるんだよ作者！ 一期屈指のなのはの名台詞『友達になりたいんだ』すらカットかよ！ あれがないと一期ラストの別れの場面の盛り上がりが欠けちゃうでしょうが！ 原作既読であること前提の二次創作だからって、カットしちゃいけない

い部分つてのががあるが！　実写版デビルマンでもリスペクトしてんのか作者あゝ。気分平和主義者の僕でも我慢の限界つてのはあるんだぜい」

無人の食堂にドウルークの作者に対する文句だけが反響する。

だが一人のクレームでは限界があると悟ったドウルークは、通信教育で修得した多重影分身の術を使い五百人くらいに分身すると、全員で『書ーけ！　書ーけ！』と合唱し出した。

そこまで言うのなら仕方ない。需要があるかどうかは分からないが書くとしよう。まずは海上決戦から。

では気を取り直して……。

あれは今より三日前、高町なのはがアースラと協体制を敷いて十日目まで遡る。

管理局のジュエルシード回収速度に焦りを抱いたフェイトは、海にある六つのジュエルシードを一気に回収するために、海中に魔力の電気の魔力を流すことで強制発動するという暴挙に出た。

海上では暴走した六つのジュエルシードによって形成された『海の怪物』と必死に戦うフェイト。そしてそれを必死にサポートするアルフ。

なのはは今すぐ自分も駆け付けようとしたが、クロノとリンディは『放っておけば自滅するから、それからジュエルシード諸共に確保する』という非情な答えを出す。

幾らフェイトが九歳の少女といえど、管理局からすれば犯罪者。犯罪者の安全の為に余計なリスクを背負う必要はない、というのは極めて合理的な判断といえるだろう。

だが合理的理由で納得できるならば、なのははこの場所にはいない。ユーノのアシストにより命令違反を犯して勝手に出撃するのは。

なのはが出撃すれば当然のように隣にはドウルークが付き添う。

「行こうかなのは！ フェイトを助け読者に露骨な好感度アピールするために！ 無限の空へ、さあ行く——むむっ！ ジェットパックに雷が直撃！！ いや————ん！」

「ドウルークウ——————！！」

「カット」

物語が良い所に入った途端、ドウルークが強制的に過去回想をストップさせる。

自分からカットするなど言っておいて、口の根も乾かぬうちに今度は自分でカットするとはどういうことなのか。地の文だって我慢の限界というものがある。

「過去は気にするなよ。未来に生きようぜ」

主人公には過去未来でもなく、ちゃんと現実を見て生きて欲しいところだが。

「現実」なんて曖昧なものさ。客観的に現実だけを映すのは機械だけだよ。観測者が“人間”である以上、多かれ少なかれ主観が混ざる。大抵の場合は自分にとって都合の

良いね。もつと酷くなると都合の良い妄想に自分の現実を合わせ始めるんだ」

無駄話はそこまでだ。しつこいようだが読者はオリジナル主人公と地の文の漫才なんて地雷丸出しなやり取りなんて欠片も興味ないのである。

いつまでもこんなことやっていると、いい加減に洒落抜きで読者が離れる。

「分かつてるさ。だからこそこれから行くんだろう。出番を確保するために——僕
の、一番の友達のところへ」

涼やかな潮風が海の香りを運び、水平線の彼方からは太陽が顔を覗かせ始めている。
今日、この臨海公園で全てに決着がつく。

お互いの持っているジュエルシードを全て賭けた、フェイトとの最後の本気の勝負。
約束の時刻まで後少し。

なのは目を瞑って自己の埋没しながら、ユーノもアルフも固唾を飲んでフェイトが
現れるのを待つ。

「なのはああああああああああああああああああ!!」

だがそんな張り詰めた雰囲気や台無しにするように、ドゥルークの叫び声が静寂を切り裂いた。

「どう、ドゥルーク！ どうしたの？ アースラで高みの見物するって言ってたじゃない

「い」

「僕はなのはが不安な時にはいつだって駆け付けるのさ」

「！」

ドウルークの口調は相変わらずの調子だったが、それは鋭いほどに凶星をついていた。

フェイトと友達になりたい。その気持ちは掛け値なしになのはの最も強い感情だ。だからリンデイやクロノに無理を言つてまで、この戦いを許可してもらつたのである。

けれど心の片隅には黒い霧が漂っている。

本当に大丈夫なのか、負けたらどうしよう、もしも何もかもが失敗に終われば皆に迷惑をかけるだけではないのか。何もしないでいるとそういう不安な想像が次々に思い浮かんできてしまう。

決戦前だというのに目を瞑って自己埋没していたのは、精神集中などという立派なものではなく、ただ目の前の不安から逃げていただけだったのかもしれない。

「不安がらなくなつて大丈夫。フェイトとの一騎打ちなら、僕も戦うし」

「だ、駄目だよ！ これはフェイトちゃんと一對一の本気の勝負なんだから！」

「おいおい。僕はなのはの最初の友達なんだぜい。つまりは一心同体、問題なんてないね。」

それに正々堂々な主人公より、卑怯上等な主人公のほうが厨二病患者には受けが良いんだ。『戦いに卑怯も糞もないだろ（キリッ）』みたいなこと真顔で言っちゃおうお年頃には絶対ヒットする。夢溢れるファンタジーな世界で、世界観無視して銃火器とか使っちゃおう主人公なら尚良しだ！

自分の出番がかかっているからなのか、或はなのはの不安が余程強いからか。普段以上に勢いよくドウルークは畳みこんでくる。

「分かるだろ？ ここのまま原作準拠な展開をだらだら続けていたら、読者がそろそろ『原作をなぞってるだけで面白くない』っていう的確な指摘をしてくる。

この s s が大成するためにはここらで一つ読者をアツと言わせるような展開が必要なんだ。例えばこう……僕がフェイトにフラグをたてるとか？

いや駄目だな。客受け狙って不必要な恋愛描写を入れるのは駄作への第一歩だ。実写版ガツチャマンの悪例は真似しちやいけないな、うん。ならいっそ——」

「ドウルーク」

「じゃあ僕となのはが融合して、スーパー野菜人ナノークになるっていうのは……」

「ドウルーク！」

「おいおい、そんなに気焰をあげてどうしたんだい？ 夫の不倫現場を目撃した妻のヒステリックみたいにな」

「ごめん」

「……………」

「ドウルークの気持ちは嬉しいよ、不安でいっぱいだったから、ちよつと元気が出た。でも……フェイトちゃんとは、私が一人だけで向き合えないといけないの」

「……………」つまり、僕は必要かい？」

「必要とか必要じゃないとかないよ。ドウルークは……応援してて。そしたら頑張るから」

天使のような空元気にドウルークは常日頃の剽軽なそれではなく、微かに父親のような暖かい笑顔を見せる。

ドウルークはなのはの頭をわしやわしやと撫でてから、大人しくユーノやアルフのうに観戦へ回った。

「まったく。決戦直前だつてのにこの調子で大丈夫なのかい？」

「大丈夫さ。なのはの目を見てごらんよ。もうドウルークなんて見ていない。なのはが見ているのは——これから来るフェイトだけだ」

「まったく寂しいことだけどね。ボカア娘を嫁に出す父親の心境だよ。僕、泣いちゃいそうだけ」

アルフの心配にユーノはなのはの瞳を指さすことをもって答えとした。それを見て

アルフも納得する。

目は口より物を言うとはよく聞く話だが、なのはの不屈の双眸は覚悟と決意の強さを雄弁に告げていた。

そしてその時が訪れる。

街灯へ降り立つ黒衣の魔導師。フェイト・テスタロッサが決戦の場に現れたのだ。

「フェイトちゃん……っ！」

白の魔導師と黒の魔導師は、朝焼けの中で激突する。

分かりきった物語を記す必要はないだろう。

高町なのはが不屈の心で束ねた星々スターライト・フレイカーの輝きは、フェイト・テスタロッサを撃ち落とす

た。

そして次元を飛ぶ舟に、破滅の紫雷が堕ちる。

一連の流れを見届けると、ドゥルークは何も言わず去っていった。

第X話 この物語はフィクションです

なのはとの戦いに敗れたフェイトは、管理局によつて保護されアースラへ移送された。

保護といつてもフェイトの腕には手錠が嵌められ、どちらかというと確保の方が近いかもしれない。

リンディを始めとした管理局側もフェイトの事情は分かつてはいるが、だからといって規則をうやむやにして良い筈はなく、犯罪を犯したフェイトを拘束しない訳にはいかないのだ。フェイトが高ランク魔導師であれば尚更である。

『母親が逮捕されるシーンを見せるのは忍びないわ。なのはさん、彼女をどこか別の部屋へ』

リンディとて職務に忠実なだけの冷血人間ではない。幼いフェイトの心を気遣い念話でなのはに指示を出す。

しかしタイミングの悪い事にフェイトを別の部屋へ移す前に、フェイトはモニターに映る自分の母親を見てしまった。

武装局員がプレシアを取り囲み、投降を迫る。多勢の無勢だが大魔導師と謳われた所

以か、プレシアは鼻で笑うだけで降伏など考えてもいないようだった。

しかし局員が玉座の後ろにある部屋に入った途端、プレシアが般若の如き形相で局員に雷撃を放った。

「え!？」

そしてその部屋にあるモノを見て、なのはは絶句する。

部屋にあったのは巨大な生体ポッド。そして緑色の液体に浮かんでいるのは、フェイトそっくりの少女だったのだ。

『私のアリシアに近寄らないで!!』

「アリ……シア」

フェイトにとつて母が怒る所なんて何度も見慣れた光景のはずだった。

けれど違う。怒っているのは同じだが、今のプレシアは深すぎる愛情故に怒っていた。それを理屈ではなく感覚で悟ってしまったからか、フェイトは赤い瞳を揺らしながら自分そっくりの少女を見る。

『はあ。もう駄目ね、時間がないわ。たった9個のジュエルシードじゃアルハザードに辿り着けるか分からないけど……。でも、もういいわ。終わりにする。この子を亡くしてから暗鬱な時間を、この子の身代わりの人形を娘扱いするのも。』

聞いていて? あなたのことも、フェイト。せつかくアリシアの記憶をあげたのに

そっくりなのは見た目だけ。役立たずでちっとも使えない私のお人形』

「最初の事故の時にね、プレシアは実の娘、アリシア・テスタロッサを亡くしているの」
俯きながらエイミーは事情を知らないのは達にも説明する。

この「真実」ばかりは明かさない内に全てを終わらせたかった、とその震える唇が告げているようだった。

「彼女が最後に行っていた研究は使い魔とは異なる人造生命の生成。そして死者蘇生の秘術。フェイトって名前は当時彼女の研究に着けられた開発コードなの」

プロジェクトF・A・T・E。有体にいえばクローン人間の製造技術だ。

死んだ人間と遺伝子的にはまったく同じクローンに、その人間の記憶を転写する。人道的道德的問題に目を瞑れば、限りなく死者蘇生に近い結果を実現する画期的発明とすらいえるだろう。

尤もその研究がどういう現実を齎すかは、今のプレシアとフェイトの関係が全てを現していたが。

『よく調べたわね。そうよその通り。だけど駄目ね、ちっとも上手いかなかったわ。クローンは所詮クローン。失った物の変わりにはならないわ』

「やめて……」

『アリシアはもつと優しく笑ってくれたわ。アリシアは時々わがままも言ったけど、私

の言うことをとてもよく聞いてくれた』

「やめて……っ」

プレシアの独白は鋭利なナイフとなってフェイトを切り裂く。

なのはは目尻に涙を溜めながら懇願するが、モニターの向こうのプレシアはまるで聞こえてないように続けていった。

『アリシアはいつでも私に優しくかった。フェイト、貴女はやっぱりアリシアの偽物ね。せつかくあげたアリシアの記憶もあなたじゃダメだった』

「やめて……やめてよー」

『アリシアを蘇らせるまでの間に私が慰めに使うだけのお人形。だから貴女はもう要らないわ。どこへなりと……消えなさい！』

「お願い！もうやめて！」

『フフフ……いいことを教えてあげるわフェイト。あなたを造り出してからずっとね。私にはあなたが……大嫌いだったのよ！』

それが止めとなった。この世の誰よりも愛しい母親から告げられた、余りにも残酷な拒絶の言葉はフェイトの心を砕いた。

心が砕ければ、身体も同じ末路を辿る。フェイトは糸の切れた人形のようにその場に崩れ落ちた。

精神的ショックで倒れたフェイトは、アースラの医務室へ運ばれていった。本当ならフェイトの側についてあげたいのだが、その前にやらなければならないことがある。

ジュエルシードで次元震を発生させ、アルハザードへ旅立とうとするプレシアを止めなければならない。

クロノやユーノと転移したのは時の庭園。プレシア・テスタロッサの居城。プレシアの居城には最低でもランクA相当の傀儡兵が大軍勢を成してなのは達を待ち構えていた。

一体一体が下手な武装局員を凌駕する強さをもつ傀儡兵。これだけの軍団を作り上げるあたり、プレシアの魔導師としての力量は底知れないものがあった。

圧倒的数の暴力に腰が引けそうになるのはだったが、そこで前へ出たのはクロノ。「無駄に魔力を消費することはない」

そう言うときクロノは最低限の魔力消費で、効率よく傀儡兵の軍団を片づけてしまう。

なのもフェイトも凄まじい才能を秘めた魔導師だが、執務官という重責にあつて活躍を続けてきたクロノは二人と比べても頭が二つほど飛びぬけていた。

「先を急ごう」

クロノに言われ我に返ったなのは、慌ててクロノの後を追う。

行く途中に黒い穴が空いている箇所が幾つかあり、気になってそれに視線を向けてみるとクロノからの注意が跳んできた。

「そこは気を付けて！ 虚数空間、その中じゃあらゆる魔法が発動しなくなる。当然飛行魔法もだ。落ちたら最後、二度と這い上がってこられないぞ」

「き、気を付ける……」

熟練した動きで傀儡兵を倒すクロノ。それをアシストするよう懸命に奮闘するなのは。

流れはお約束通りに進んでいく。まるで繰り返し再生されるビデオテープのように、正しい道順をなぞる様に。

だが最上階へ続く階段と、それを守護する傀儡兵が立ち塞がった時、変化は現れる。

「ここから二手に分かれる！ 君達は最上階にある駆動炉の封印を！」

「クロノ君は？」

「プレシアの所へ行く。それが僕の仕事だからね」

もしこれが正史原作に忠実な高町なのであれば素直に頷いたのだろう。だがこの世界二次創作の高町なのは正史原作ほど強くはなかった。一方で弱いからこそ、正史よりも強い決意でこの場に来ていた。

故になのははゆっくりと首を振る。

「待って。フェイトちゃんのお母さんの所へは私が行くよ」

「なのは!？」

「フェイトちゃんと一人でしつかり向き合うって約束したんだもん。フェイトちゃんのお母さんともお話しないといけないの」

「し、しかしだな」

「……お願い」

なのはがいざという時に凄まじく頑固になるのは、海上決戦や臨海公園での戦いの件で短い付き合いのクロノも知っていた。

この意思は折れず、かといって議論している時間も惜しい。そう判断したクロノは不承不承といった様子で頷いた。

「分かった。けど無理は慎むように。僕も駆動炉を封印したら直ぐに駆け付ける」

いざ決断すればクロノの行動は迅速だった。邪魔な傀儡兵を魔力弾で撃ち倒すと、最上階の階段を進んでいく。しかも気の利いた事になのはの分の傀儡兵まで纏めて倒していつてくれた。

クロノを見送ったなのはは気合いを入れる様に両頬をパンと叩くと、時の庭園中枢部——プレシア・テストアロッサのいる玉座の間へと急いだ。

だが古来より玉座にはそれを守る近衛がいるのが道理。急ぐなのはの前に現れたのは、これまでの傀儡兵とは格の違う巨大な鋼鉄騎士だった。しかも鋼鉄騎士の周囲には傀儡兵が百以上いるときている。

「なのはー、ハハハ——」

「任せなー！」

百の傀儡兵による一斉攻撃を、をユーノとアルフの二人がバインドなどの魔法を駆使して自分達に引き寄せていく。その間になのはは巨大な鋼鉄騎士に意識を集中させた。

だが流石の二人でも百の傀儡兵を一体の例外なく引き付けるなど不可能だ。挑発に引つかからない一部の傀儡兵はなのはへと突進してくる。

「なのはー！」

ユーノが叫ぶ。傀儡兵の斧は鋼鉄騎士に集中した不意を突くように振り下ろされる。

隕石のように落下してくる無機質な殺意になのはは目を閉じ、

「サンダーレイジ！」

隕石よりも速く鋭い稲妻が、傀儡兵諸共に斧を粉砕した。

これまで自分と何度も激突した魔力の気配になのはの表情は自然と綻ぶ。フェイト・テスタロッサ、色んな意味で嬉しい助けだった。

「フェイトちゃん！」

「……………」

なのはが声をかけると、フェイトは頬を赤らめて恥ずかしげに視線を逸らす。

助けてくれたお礼を言いたいのはだったが、感情のない鋼鉄騎士が悠長とそんなことを待つてくれる筈もない。背中の巨砲を展開すると、照準をなのはとフェイトの二人に向けてきた。

「大型だ……バリアが強い」

「うん。それにあの背中……」

ミサイルが直撃しようとビクともしないバリアに、タングステンだろうと粉碎する魔力砲。

プレシアの近衛なだけある。恐らく庭園内の傀儡兵の中で最も強力な一体なのだろう。一人で相手にするには厳しい相手だ。

「だけど……二人でなら！」

「うん！ うんうん！」

フェイトの強い言葉に、なのはは万感の思いで頷いた。

「いくよ、バルディッシュ」

『get set』

「こつちもだよ、レイジングハート」

『stand by ready』

レイジングハートとバルディッシュ。性格は違えどマスターを想う二機のデバイスは、心なしか嬉しそうに変形する。

魂を懸けて鎬を削った二人の少女。その行く道を屑鉄風情が遮れるものか、と魔力が狂ったように滾り出した。そして、

「サンダースマッシュャー！」

「デイバインバスター！」

薄桃色と黄金色の極光が鋼鉄騎士を跡形もなく消し飛ばした。まだ通常の傀儡兵は、何体か残っていたが、

「フェイト！ こいつらは私が抑えとくよ！ だから——」

「うん、ありがとうね。アルフ」

雑兵はアルフとユーノが相手をしてきている。これでもう二人の道を遮る邪魔者はいない。

なのはとフェイトはプレシアのいる最下層へと降りて行った。

次元震の発生源だけあって、プレシアのいる最下層には既に次元断層が蜘蛛の巣のようにながら広がっていた。

プレシアは断層から覗く虚数空間の彼方にアルハザードがあると行っていたが、少なくともなのは目が凝らした限りでは虚数空間の奥に広がっているのは『無』だけ。何一つとしてありはしなかった。

そして部屋の中にはアリシアの入った生体ポッドと、それに寄り添うように立つプレシア・テスタロッサ。

「フェイト、なにを……しにきたの？ 気色の悪い、小娘まで一緒に」

口を抑えて咳き込みながら、プレシアはあれだけ手酷く切り捨てておきながら、このこと姿を見せた自分の娘を睨みつける。吐血したのか掌には血の跡があった。

フェイトはそんな母親を真っ直ぐ見つめながら口を開く。

「貴女に言いたい事があつて来ました」

「……」

「私は、私はアリシア・テスタロッサじゃありません。貴女の造つただだの人形なのかもしれません。だけど私はフェイト・テスタロッサは、貴女に生み出してもらつて育ててもらつた貴女の娘です！」

「あははは、だから何？ いまさら貴女を娘と思えと言つての？」

「貴方が、それを望むなら」

確かに否定もされた、拒絶もされた。

記憶に残る優しい記憶は『フェイト』ではなく『アリシア』に向けたものが全てで、フェイト・テスタロッサへの愛情などありはしなかったのかもしれない。それでも、

「貴女がそれを望むなら、私は世界中の誰からもどんな出来事からも貴方を守る。私が貴女の娘だからじゃない……貴女が、私の母さんだから！」

例え母親から愛されなかったとしても、母親を愛してはならないということにはならないだろう。

遠慮もなければ、欺瞞もない。フェイトは自らの心の内にある本音を、そのまま吐き出した。

「くだらないわ」

けれどプレシアはにべもなくフェイトの思いを拒絶した。

プレシアが見るのは隣で眠る死者アリシアだけ。目の前の生者フェイトを見向きもしない。

「そんな……酷いよ、こんなのって……っ！」

それが余りにも切なくて、なのは溜まらず叫んだ。

プレシアは鬱陶しそうになのはを一瞥すると、なにかに気付いたのかスツと目を細めた。

「五月蠅い小娘ね。そうね……けど、可能性は少しでも大きい方がいいわ。高町……なのは、だったかしらねえ。お節介で薄気味悪い小娘、痛いのが嫌なら大人しくしている

「ちやんとなのはがピンチになった時には駆け付けたんだ。許してくれよ。ここからは僕も一緒に戦うから、ね？」

「仕方ないの」

プレシアの悪意に萎縮していた心は、気付けば元の調子を取り戻してくれていた。

自分の隣にドウルークがいる。ドウルークがいれば、どんな不安や困難にだって安心して挑んでいけるはずだ。

これからもそうしてきたのだから。だって高町なのはの世界には、自分を氣遣つてくれる人達に溢れていたから。自分に剥き出しの悪意をぶつけてくるような人間などいやしなかったから。そう、

——故に破綻はここに訪れるのだ。

白けた目でなのはを見下しながら、プレシアは口を開く。

「はあ。フェイト、私が言うようなことでもないけれど、友人は選ぶことね。よりにもよつてこんな精神障害者染みた子を側におくだなんて。嗚呼、お人形と精神障害者でお似合いなのかしら」

「やめて、母さん！」

禁忌の扉が開く音にフェイトが叫ぶが、プレシアは口を止めることはなかった。

プレシアは高町なのはを怒りの形相で睨みつけながら、現実をぶちまける。

縋るようにフェイトを見るのは。だけどフェイトは気まずそうに眼を背けた。

それが——主観のない、本当の現実を否応なく突き付けているようで、なのはは崩れた。

「あ、ああああ……」

始めの感情は“寂しさ”だった。

父親が入院して、母も父姉も自分に構ってくれなくて、たまらなく孤独だった幼少期。孤独を埋めてくれる“誰か”が欲しくて、だけど“誰も”側にいてくれなかったから、自分で誰かを形作った。

父親が恋しかったから、年は30代頃。

母親が恋しかったから、年は20代頃。

兄姉が恋しかったから、年は10代頃。

甘えられる父性が欲しかったから、性別は男の人で。

自分の事を必要として欲しいから、出来るだけ駄目な人が望ましい。それこそ子供の自分に縋りついてしまうような最低人間が良い。だけどニートはちよつと酷すぎるから、金使いが荒いフリーターというのが丁度いいだろうか。

生まれ落ちたのは、自分の望んだままの友達。

友達に少女が不安になったり、恐怖を感じたり、寂しさを感じた時には常に側にいた。

時に最低な不審者として高町なのはに助けを求め、時に父親のように高町なのはの悩みを聞いてくれた。

都合の良い友達に、少女はドウルークと名付けた。

「あああああああああーっ」

妄想の友人を交えた主観的現実、客観的現実を歪ませる。

腹を空かせたドウルークにこっそり残飯を分け与えていた？ 違う、現実には自分が残した残飯を自分の胃に流し込んでいたに過ぎない。

高町なのはを守るためガトリングガンを放った？ 違う、現実には彼女自身がその才能で無意識に魔力弾を形成して放っていたに過ぎない。

家族や他の友達もドウルークの存在をちゃんと認識していた？ 違う、現実には彼女を気遣った心優しい皆が彼女に合わせていただけだ。

そして現実を直視したなのはにフラッシュバックするのは、自分が寝静まった時刻に、隠れて話し合う家族の姿。

『なのは……最近独り言が多くなつたよね。部屋で何も無い方へ向かって一人でブツブツと話してたし。なんだか想像した友達と会話してるみたい……』

『父さんが事故にあつたからって、なのはの事をないがしろにしてしまった……きつとそのせいだ……っ』

第X I 話
友達さ

真実とは抜き身の刃物のようなもの。正しいが故に反論を許さず、心を傷つける。

空から風は消え、暗雲が天より星を覆い隠し、腕は光を喪失し、少女の胸にある不屈の心は砕けた。

フェイト・テスタロッサが母からの拒絶により折れたように、高町なのはもまた現実
に屈した。

「なのは！」

崩れ落ちるなのはを間一髪で抱きとめるフェイト。しかし未来を真っ直ぐ見据えて
いた輝いた瞳は、明かりが消えたように暗くなっていた。

「フッフッフ。才能は一級でも精神は三級ね。魔導師の先達として忠告するなら、夢が
見たいのなら遊園地へでも行っていれば良かったのよ。尤もその様子じゃ私の声なん
て聞こえてはいないだろうけど」

プレシアは見下しきつた目でなのはを嘲笑するが、それは少しばかり厳し過ぎるとい
うものだろう。

なのはの心は決して弱くはない。ドウルークという妄想の『友達』を作り出し依存し

たが、それは当時なのはの心が最も弱い時期に孤独を経験した故のこと。

小学生に上がりアリサとすずかという現実の掛け替えのない友達を得てからは、ドウルークが現れる頻度もかなり減っていた。プレシアが現実を突きつけずとも、恐らく中学生へ進級する前には、ドウルークという非現実はなのの中から自然消滅していただろう。

他者の不幸を自分の事のように共感できる責任感、土壇場での度胸、敗北しても即座に立ち上がる気力。九歳という年齢から考えれば、高町なのはの精神力は寧ろ高過ぎる程だ。

だが現実という劇薬は、そんな精神を碎くに十分な毒性を秘めていた。これはそれだけのことである。

「けど好都合だわ。終わらせましょうか」

プレシアの杖の先端に集まっていく魔力。アースラへの次元跳躍魔法とは異なり、非殺傷設定なのは眠るアリシアの前で人を殺したくないという親心か。或はなののはのよな子供を殺すほどに外道に堕ちきつてはいない証左か。

どちらにせよ雷は放たれた。空間を焼き払いながら雷はなのはへ魔手を伸ばして行く。

『Photon Lance』

雷を薙ぎ払ったのは同じ雷。なのはを守る様に前へ出たフェイトが、バルディツシユの一閃で母の悪意を切り裂いた。

「退きなさいフェイト。邪魔よ」

鬼の視線がフェイトを射貫く。もしなのはと出会う前のフェイトであれば、母がそう命じれば申し訳なさそうに俯きながら従っただろう。

しかし母と本当に向き合う覚悟を決めたフェイトは、もはや盲目ではなかった。

「ごめんなさい。でも例え母さんの言うことでも、傷つけるわけにはいかないから」
「……そう。なら纏めて消えるといいわ!」

重病人のプレシアは魔法を発動させる事に、リンカーコアが刺激され地獄の苦痛を味わう。常人なら念話ですら使うことは厳しいだろう。

だがプレシアのアリシアへの愛情は痛みすら捻じ伏せていた。プレシアの背後に無数の雷槍が生成され、それらが猟犬のようにフェイトへ殺到していく。

「——くっ!」

母の攻撃に対して、フェイトがとったのは防御。ありったけの魔力で障壁を展開して、雷槍を受け止める。

雷槍が障壁にぶつかるとに衝撃がフェイトへと伝わり、痛みに耐える様に歯を食いしばった。

「愚かね、馬鹿正直に防ぐだなんて。躲せばいいものを」

なのはの武器が鬼のような防御力と圧倒的砲撃にあるならば、フェイトの最大の武器は雷に匹敵する鋭い速度だ。プレシアの言う通り真正面からバリアで防ぐなんて、愚策もいいところである。

けれどフェイトの背中にはなのはがいた。そのため回避という選択肢は、最初からフェイトにありはしなかったのである。

「はあ……はあ……」

気魄でプレシアの雷撃を耐えきったフェイトは、痺れの残る右手をゆっくりと下ろす。

プレシアの攻撃を防いだ代償は大きかった。この右手の痺れは当分の間は回復しないだろう。長くとも今日一日、早くともこの戦いの最中には。

「フェイト、ちゃん……?」

だがフェイトの行為は決して無駄ではなかった。命懸けのフェイトの行動は、暗闇の世界にいるなのにも届いたのである。

フェイトを見上げるなののはの瞳には、ほんの微かな明かりがあった。

「今度は私が……戦う、番だから。だからそこで見てて……」

こんな自分でも母と向き合う為にもう一度立ち上がることが出来たのだ。

なら彼女ならきつと同じように立ち上がれるはずだ。しゃんとして冷たい現実とも、向き合える。

「しつこいわよ！ いい加減に退きなさい、退けと言っているでしょうフェイト！ 私
は取り戻す。私とアリシアの……過去と未来を！ 取り戻すの……こんな筈じゃなかつ
た……世界の全てを——ッ！」

そこにフェイト、貴女の居場所なんてないわ。さつさと私の前から消えなさい、目障
りよ！」

このままでは罅が明かないと痺れをきらしたプレシアは、自分の肉体にかかる負荷を
度外視して、AAAランク級の雷撃魔法を放った。

普段のフェイトならまだしも消耗しきったフェイトでは防ぐことも躲すことも不可
能な魔法。なまじ娘であるだけ自分が逃れようのない袋小路にいることを悟ったフェ
イトはしかし、尚も諦めずに再び障壁を展開した。

拮抗はほんの数秒。プレシアの紫電は数秒でフェイトの盾を喰らい尽くした。——
——しかしその数秒が明暗を分ける。

『Blaze Cannon』

庭園の壁を突き破ってきた青い魔力光が雷を相殺する。

純粋な破壊力ではなく、病状の身であるが故に構成が甘くなった部分を的確に穿つこ

とで、術式そのものを乱す正確無比な砲撃。これほどの神業をやったのけるのは、この庭園に一人しかいなかった。

頭から血を流しながらも、瓦礫を踏み越え現れたのはクロノ・ハラオウン。自分の役目たる駆動炉の停止をやり終え、この場に駆け付けたのだ。

「世界は、いつだって………こんなはずじゃないことばかりだよ!!」

「ずっと昔から、いつだって、誰だってそうなんだ!　こんなはずじゃない現実から逃げるか、それとも立ち向かうかは、個人の自由だ!!」

「だけど、自分の勝手な悲しみに、無関係な人間を巻き込んでいい権利はどこに誰にもありはしない!!」

「なのもフェイトも知らぬことだが、クロノもプレシアと同じように運命の理不尽によつて大切な人を失っている。謂わば同じ痛みを知る者だ。」

「それ故の悲痛な叫びは刃となってプレシアに突き刺さるも、娘への愛情で魂を鋼鉄と化したプレシアにはビクともしなかった。」

「次から次へと………蛆は沸くものね。死になさい」

「見下しながらもプレシアは、クロノがなのはやフェイトとは格が違う実力者であると一目で見抜いたのだろう。」

「そして残り時間も少ないことを悟っていたプレシアは、初手より盤上的一切合財を捻

じ伏せる最大出力の魔法を実行する。

「光が四方から!?」なんて馬鹿げた量の魔力を……っ！ フェイト、なのはを連れて逃げろ！ 僕が、どうにか！」

プレシアの命すら燃料とした大魔法はランクにしてSS、下手すれば前人未到のSSSランクに迫るほどだった。ここまで規模が大きいかともはや術式云々の工夫でどうこう出来る次元ではない。圧倒的パワーにはパワーで対抗するしか方法がなかった。

クロノは自分自身の魔力を根こそぎデバイスに注ぎ込んで、砲撃魔法たるブレイズカノンをぶっ放す。

「終わりよ、これで」

だがそれでもプレシアの大魔法には到底届かない。物質を消滅させながら突き進む巨大なプラズマ砲には、クロノの全身全霊の一撃すら僅かな時間、進行を押しとどめるのが精一杯だった。

それでもその間にフェイトがなのはを連れて逃げてくれればそれでいい。そう思い振り返ったクロノは仰天した。

「フェイト、聞いてなかったのか！ どうして逃げてない！」

「ごめんね。でも向き合うって決めたから……っ！」

クロノの砲撃に加勢するように、フェイトも残る全魔力を注ぎ込みでの砲撃魔法を

ぶつ放した。青い魔力光に黄色い魔力光が重なって、それが破滅の巨光を更に押し留めた。

しかし二人掛かりの砲撃でも、まだ後一步プレシアには届かない。この劣勢を覆すにはもう一手が、とっておきのエースカードが必要だ。

「ありがとね。フェイトちゃん、クロノ君。もう、大丈夫だから」

だから白い少女の声は、クロノとフェイトにとつて福音にも等しかった。

フェイトが振り返れば、そこには嘗てのように『不屈の心』を瞳に宿した少女が立っている。残酷な現実を直視しながらも、目を逸らさずに。

高町なのはにとつてドウルークは『人生最初の友達』だった。人からはただの妄想だろうと笑われるかもしれないが、それでも掛け替えのない友達だったのだ。

その友達はどうもない。夢の住人であるドウルークは、なのはが夢から覚まされたことで消えてしまった。

けれど夢の中の都合の良い友達がなくなってしまうても、高町なのははこの“現実”で得た掛け替えのない友達がいる。

アリサやすすずか、それにまだ友達になりきれないけれどフェイトだって。

だったらいつまでも終わった夢を引きずっていないで、現実と向き合わなければ。

「いくよ！ レイジングハート！」

『All right, my master』

「ディバイン……バスター!!」

青と黄に交わる桃色の巨光。三つの色が重なり合った輝きは、プレシアの滅びの光を押し留め……否、押し返していった。

なのはも、フェイトも、クロノも。三人全員が『いける』と勝利を確信した時。

プレシアの背後のジュエルシードが鈍く輝いた。

「……え？」

瞬間。均衡は一気に崩れ去る

爆発的に威力を跳ね上げた滅びの巨光は、束ねられた三つの輝きを駆逐すると、三人の若き魔導師を吹っ飛ばした。

「まさ……か……ジュエルシードの魔力を、加えた……のか……そんな、馬鹿な……こんなことが、」

「出来る筈ないと？ 侮ったわね、執務官。私がアリシアのために、どれだけジュエルシードについて研究を重ねたと思ってるの。ジュエルシードが持つ人知を超えた魔力を制御する術式くらいちゃんと構築済みよ」

「っー」

ジュエルシードはたった一個の思念体すら並みの魔導師を上回るパワーを持ってい

る。

そんなジュエルシードが九個あって、しかも並外れた精神力をもつ高ランク魔導師に完全に制御されたとしたら、その力は人間を超えて神の領域にすら届くだろう。

なのは、フェイト、クロノの三人の砲撃は人間としての極限域ではあったが、神には届かなかった。であれば敗北は必定というものである。

「うう……」

砲撃に文字通り全魔力を注ぎ込んでいたなのは、もはやバリアジャケットを維持するだけの余力すら失い、時の庭園に無防備な体を横たわらせる。

魔導師としての経験値が長いフェイトとクロノはバリアジャケットこそ解除されていないものの、もはや戦闘継続は不可能だった。

「……これで、もう本当におしまいね」

倒れるなのは下へプレシアがゆっくりと近づいてくる。

逃げたくてももはや立ち上がる体力すら残っておらず、足は棒のように動かない。それでも藁をも掴む思いで、なんとか動く手を動かし、なにか武器になるものはないかと探る。

が、そんなものが都合よく見つかるはずもない。なのはが手にとつたのはウエストポーチに入っていたガムだった。

(ああ、このガム)

見覚えがあるガムだと思ったら、いっだったか映画館のお土産としてドウルークが買ってきたガムだった。なのは一枚だけ分けて貰ったのでよく覚えている。

といつてもドウルークはなのはの妄想が生み出した存在。このガムもなのはが自分で購入したのを、ドウルークが買ってきたものと都合よく記憶を改竄したに過ぎない。ドウルークがポケットにいれたはずのガムがこうして自分のウエストポーチに入っているのが良い証拠だ。

(あれ……？　ちよつと待って、それって……？)

繋がる。プレシアがどうしてアルハザードへの旅立ちを遅らせてまで、高町なのはへ攻撃を仕掛けたのかが。

ドウルークがポケットの中にしまったと記憶改竄したものは、実際には高町なのはのウエストポーチへしまわれていた。

ということとは、である。一縷の望みをかけてウエストポーチの中を探ると——果たして、願い^{ジュエル}を叶える青石^{シード}は、運命のように高町なのはを待っていた。

// 友達が欲しい //

幼い頃の高町なのはが願った細やかな、けれど切実な願い。

真理を突き抜けるほどの、切なる祈りは受諾された。此処に少女の夢想は、現実世界

へと流れ出す。

「やあ、お嬢ちゃん。十年來の親友に絶交告げられた二トみたいな顔して何やってるんだい？」

趣味の悪い青いスーツに、これまた趣味の悪い鬚髯柄のネクタイ。覗き込むようなグリーンの瞳は猫のように爛々と光っている。年齢は……良く分からない。十代のようにも見えるし、二十代のもあるし、三十代のも思える。もし口を真一文字に閉じてさえいれば二枚目と断言できた悪魔的美貌の持ち主だが、おどけたように緩んだ口元と軽そうな雰囲気、外見的魅力を完全に相殺していた。

フエイトもクロノもプレシアも、初めて見るその男に困惑を隠せない。だが高町なのはだけは知っていた。その男の正体を。

「延長12回裏、3点差、ツアアウト満塁。一打サヨナラのチャンスで打席には主人公エースに代わり代打ジョーカー」

「何なの、貴方……？ ジュエルシードの思念体？ それともその白い魔導師の仲間？」

「どっちも不正解だよ。ボカアそんなもんじゃあないね」

「なら、なんだというの……？」

男は高町なのはを守る様に前に立つと、おどけたように言った。

「ドゥルーク
友達さ」

第XII話

ナイスだろ？

ジュエルシードは扱いが難しいながら『願いを叶える』という単純にして夢のような機能をもつロストロギアだ。

けれどフェイトは勿論、執務官であるクロノや大魔導師であるプレシアすら予想だにできなかった事態——少女の妄想上の人物を現実 realistically 実体化させるという奇跡に、誰もが声を失う。

「暴走状態じゃない……完全な安定発動、ですって……空想を、現実には？　なんて馬鹿馬鹿しい……万分の一に等しい奇跡が、目の前でっ！」

喉から手が出るほど欲しい『奇跡』を、形は違えど見せつけられプレシアの顔が怒りに染まる。

だがそこはプレシアも伊達に年齢を重ねたわけではない。理性を失うほど沸騰した頭を、直ぐに理性喪失一步前までクールダウンさせた。

「けど関係ないわ。予定が少しばかり狂っただけよ」

プレシアはなのはの持つジュエルシードを奪うつもりで攻撃を仕掛けた。それがジュエルシードを封印してから奪うという風になっただけ。

「ドウ、ドウルーク？」

焼き肉屋から漂うような、肉が良い塩梅に焼ける香ばしい匂い。なのははオロオロとドウルークだったらしい『肉の塊』に近付く。

治癒魔法をかける余地が微塵も残ってない無残な死体。誰もがドウルークが一瞬にして死んだと確信する中、なのはだけは確信をもって肉の塊に問いかけた。

「ドウルークはこんなことくらいじゃ死なないよね？」

「当たり前だぜ」

『!?!』

いきなり立ち上がった肉の塊に、プレシア含めた全員が絶句する。

「主人公がひたすら無双なんてラノベじゃばりばり現役でもヒーロー映画じゃ絶滅危惧種。主人公が一度敵にやられてピンチを演出すんのがお約束。ボカアそのへん分かっているんだぜい。」

「つたくプレシアちゃんもいきなり電気ショックなんて酷いじゃない。焼かれた肉のメイクだつて結構時間かかるんだぜ？」

「バケツ一杯に入つた水を被り、メイクを？し落とすドウルーク。」

「え？なんでこんなところにバケツがあるのかつて？知らん、そんなことは地の文の管轄外だ。少なくともそんな描写を入れたつもりは毛頭ない。」

「小癩な真似を！」

「うわつと！ これじゃ猛獣だ。おぼあちゃん扱いにプツツンしちゃったかい？ メイクじゃなくてキャラ設定が落ちてるぜ。ほらリラックスリラーツクス。僕はおぼあちゃんみたいな病あり皺ありでも全然OKだからさ。鞭打ちが好きなら任せておきなよ。僕は好きだぜ、やるのもやられるのも。犬プレイとか最高じゃない？」

「減らず口を閉ざしなさい！ 死ぬと言っているでしょう、大人しく死になさい！」

再び放たれる電撃だが、今度はサーカスのアクロバティックのような動きで軽快に躲けていくドウルーク。

「悪いね、サービスの初ファーストアタック撃はおしまいだ。ここからは僕のターンだ。推奨BGM // P r a y 」。僕等が奈々様最高だね」

時代的にオーパーツなスマホを操作すると、時の庭園にリリカルなのはファンなら知らぬ者のいないあの名曲が響き渡る。

テンションあがってきた、そうドウルークが言うメインウエポンであるガトリングガンを容赦なくぶつ放した。

「イイイイイイイイイイイイヒヤツホオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
!!」

毎秒数百発——否、毎秒数千発。もはやファンタジーな量の弾丸を吐きださせな

がら、ドウルークは危ない葉を決めた葉中のような陶醉顔で叫び声をあげる。

プレシア・テスタロツサの堅牢な魔力障壁は、ジュエルシードという魔力源の効果も合わさって、なのはすら凌駕する鉄壁さだ。

ガトリングガンは愚か地球最先端の最大火力をぶつけようと、プレシアには傷一つとして与える事は出来ないだろう。しかしドウルークのガトリングガンは全てが意味不明だった。

「なっ——!?!」

プレシアが驚くのは無理もないことだろう。ミッド人にとつては石器時代の遺物にも等しいガトリングガンが、己の魔法障壁を削り取っていつているのだから。

なのはが主観的現実で客観的現実を塗り替えた際のように、ガトリングガンに魔力が籠っているという訳ではない。少なくともプレシアの見る限りガトリングガンにも弾丸にも種も仕掛けも魔法もありはしなかった。

だというのに現実にはプレシアの魔力障壁は削られていく。長年を研究者として生きたプレシアからすれば、匙を投げたくなるくらい意味不明で理解不能な事態だった。

「ジュエルシードの願望実現機能とでもいうの! この、小癩なのよ!」

このままでは魔力障壁を破られる。そう直感したプレシアはジュエルシードの魔力を防御から攻撃へ回し始めた。

「おろ。これは次のターンで仕掛けてくるな。ならば僕のターン、リバーズカードを一枚セット。ターンエンドだ！」

ドウルークも負けてはいない……というか頭おかしい。いきなり腕にデュエリスト御用達のディスクつばいものを装着すると、カードを一枚伏せた。

（僕の伏せたカードはミラフォだ。これで次のターン、攻撃してきた瞬間——ジ・エンドだ）

「小賢しい！」

などと考えているとプレシアの電撃が伏せてあつたカードを破壊した。

「え、エンドサイクだとお!? 地の文この野郎！ 主人公の逆転の一手になんてことするんだ！」

あれだけ露骨にフラグをたてたら、展開的に破壊するしかないだろう。

それにミラフォなんていうのは現実でも創作でも破壊されるのが仕事のようなものだ。

「フリーチェーンにしとけば良かったか。あ、でもどっちみち伏せたターンは使えないな、うん」

「ごちゃごちゃごちゃごちゃと余所見とは良い身分ね！」

プレシアの周囲に出現した数百の魔力弾が、真つ直ぐドウルーク目掛けて飛んでく

る。

「身分？ いいや僕は平民だぜ。桃髪ツンデレ公爵令嬢に召喚されたら周囲に平民扱いされてからファーストキスからの恋のヒストリーが始まっちゃうくらい平民だよ。もつともベッドの上なら王様にも豚にでもなるけどねボカア」

「最低ね、死になさい！」

「本日三度目の死になさい入りました。作者ー、あんまりワンパターンな台詞言わせんなって。国語の勉強しろよ」

ドウルークが調子にのった言動をとっていると、天罰が当たったかのようにガトリングガンが魔力弾によって粉々に粉碎された。

それでももうこの戦いの最中は絶対にガトリングガンは使えないだろう。そう、絶対に使えない。

「おい、作者あ！ 今の腹いせで僕に不利な風に展開にしただろ？ 態々二度言っただけ押ししちやっつてさあ！ だけどいいもんねー、僕にはガトリングガンちゃんが殉職しちやっつてもこつちがあるもんねー！」

そう言っただウルクが取り出したのは、いつだったかサッカー少年の頭を殴りつけたハンマー。いや現実にはサッカー少年をKOしたのは、なのはの誘導弾だったわけだが。

「皆大好きハンマー。しかも本日は特別閉店セールの二刀流だぜ」

ドウルークは二本のハンマーを風車のように回しながら、プレシアに殴りかかっている。

このハンマーもまたガトリングガンのように魔力反応らしいものは一切ない。しかしガトリングガンが意味不明な現象を発生させたことを見たプレシアは、このハンマーもまた意味不明な代物であると結論付けた。

そして迂闊に接近させるのは不味いと判断し、ここで勝負に出てきた。

ジュエルシードの魔力をリンカーコアへと流し込む。骨が溶けていくような苦痛と共に、プレシアは残り少ない寿命が更に減っていくことを感じたが、アルハザードへ到達するまで保てば良いと強行する。

「終わらせて、あげる」

なのは達三人に放ったものより更に巨大な——SSSランクを通り越して計測不能なまでの魔力。もはや天災にも等しい、解き放たれば星さえ砕くであろう一撃だ。

こんなものが解き放たれてはドウルークは兎も角、余波だけでなのは達の命はこの世界から消滅するだろう。

しかしである。ヴィラン扱いすら他の悪役に失礼な最低不審者だろうと友達なのはが望む

ならヒーローになるのがドウルークだ。なのは最初の友達

そのドウルークがこのラストバトルにおいて、高町なのはが死ぬ可能性を見逃がすはずがない。

「バック頂き」

プレシアの背後へ瞬間移動したドウルークは、その鉄壁な障壁にハンマーを叩きつけた。

意味不明なハンマーの一撃が、ただの一撃で鉄壁の魔力障壁を粉々にするという意味不明な現実を紡ぎ出す。そしてもう一本のハンマーがプレシアの脳天目掛けて振り下ろされた。

「あり?」

プレシアの脳天に命中したハンマーが何故だか空振り、とほけたような声をあげるドウルーク。

無論プレシアの魔法に種も仕掛けもないなんて事は有り得ない。プレシアの姿が霞のように消えるのを見て、戦いを見ていたクロノがはっとした顔で叫ぶ。

「フェイクシルエット……っ! 不味い、後ろだ!」

クロノの警告は一步遅かった。フェイクシルエット 幻影を餌にして、潜んでいたプレシアが背後からドウルークの首根っこを掴んだのだ。

「やあ、ミセス・テストロツサ。ドツキリかい？」

「貴方はSSSランク魔法をぶつけたとしても生還しそうな意味不明さがある。だから確実に……………この手で、念入りに殺す」

「良い手じゃないか。褒美にオプーナを買う権利をやろう」

「要らないわ」

プレシアがギュッと握る力を強めた瞬間、100億Vの電流がドウルークの全身を蹂躪した。

ゼロ距離から直接の電撃。重病人でフェイトのような高速移動が厳しいプレシアにとつては実用的ではない技だが、大技に上手く小技を混ぜてやればこうも嵌めることができる。

「これで……………死んだ、かしら？」

黒焦げになって倒れたドウルークを踏みつけながら、プレシアは落ちていたハンマーを虚数空間に捨てる。

それでもこれまでの意味不明さのせいで安心できなかったプレシアは、魔法で黒焦げの死体をバラバラに引き裂いてから、ハンマーと同じように虚数空間へと捨てた。

虚数空間に落ちれば二度とは戻れない。プレシアは苦い勝利の美酒に微笑んだ。

「これで本当に……………終わったわね」

「ああ、お宅がね」

「っ！」

プレシアが振り返る。するとそこには左手に『ドッキリ成功』と書かれたパネルをもち、右手に銃を構えたドウルークの姿があった。

ギョツとしてプレシアが視線を虚数空間へ落とせば、さつきまで死体だったものが『ハズレ』という紙が貼られた丸太に変わっていた。

日本人は愚か日本好き外国人でも知っている最も有名な忍法の一つ、即ち変わり身の術である。

「ナイスだろ？」

「まっ——」

「BANG！」

ふざけたような擬音と一緒に、生々しい本物の銃声が響く。

銃から放たれたものが命中したのはプレシアの腹部。だがそれだけでは終わらない。

「BANG！ BANG！ BANG！ BANG！ BANG！」

左足から左手、右足から右手。体に両手両足に命中させた後、最後にドウルークはプレシアの額に銃口を向けた。

「もうやめて！」

ドウルークが最後のトリガーを引く刹那、割つて入つたのはフェイト。

「母を庇うのかい？ あれだけのことをされておいて。言つておくけど僕………わりと冷酷だから、相手が女の子でも容赦なく撃つちゃうよ？」

「そうよ退きなさいフェイト。貴女に……人形に命を庇われるなんて御免よ……」

「ほら、ママもこう言つてるぜ？」

「……それでも、この人は私の母さんだから」

「感動的だな」

「だけど無意味じゃないよ」

フェイトに並ぶように、ふらふらの足取りでなのはがドウルークの前に立ち塞がる。

「やれやれ。執務官が民間人を盾にしておいちや失格だな。でも僕も目の前で無意味な殺生が起こるのを見過ごすわけにはいかない。例えばそれが……犯罪者だろうと」

なのはとフェイトを庇うように両手を広げたのはクロノ・ハラオウン。

三人の少年少女はドウルークという不審者を真つ直ぐ見据えながら、不転の決意を

露わにした。

「おいおい。これじゃ僕が悪役みたいじゃないか。酷いなあ〜」

「だつたら銃を下ろしてくれ。君には色々聞きたいこともあるんだ。そして出来れば取り調べ室じゃなくて、お茶を交えながら平和的に話をしたい」

「あらやだクロノきゅんったら、たかだか麻醉銃に大袈裟な対応しちゃってさ」
「え……？　ま、麻醉銃だつて!？」

「ほら。良く見ろよ、プレシアの生足とか生乳」

生乳の部分はスルーして、両手両足を見れば確かに銃痕は残っていないし血も流れていない。代わりに刺さっていたのは麻醉針だった。

ドウルークはなのはへ顔を向けると、悪童のようにニヤリと笑った。

「言つただろう？　猛獣相手には実弾じゃなくて麻醉銃つてね。動物愛護団体対策はバツチリだぜボカア」

くるくると本物そっくりの麻醉銃を弄びながらドウルークは言った。

これにて全て決着。全ての元凶であるプレシア・テストアロツサは倒れ、ヒーローは勝利した。ならば後はお約束に従い、大脱走エスケープの時間である。

異変に最初に気付いたのはクロノだった。

「不味いぞ！　時の庭園が崩れる、早く逃げないと虚数空間に巻き込まれる！」

「はいきました。何故かバトルが終わって決着がついた途端に崩れ始める時の庭園。一種のご都合主義だよ、これ。それとも時の庭園に実はAIがあつて、空気読んで根性で持ち堪えてたの？」

「なにを意味の分からない事を言ってるんだ！　急いで脱出するぞ！」

「脱出？ どうやって？」

「そんな魔法に決まって——ハッ！」

そこでクロノは絶望的現状に気が付いてしまった。クロノ含めなのはとフェイトは魔力を枯渇して、とてもではないが飛行魔法や身体強化など使えなくなっている。しかも戦闘のダメージのせいで走ることすら儘ならない。

こんな状況で麻酔銃で動けないプレシアも一緒に、時の庭園から脱出できるか否か——そんなものは計算するまでもなく、可能性は限りなく0%である。

脱出するよりも早く、刻一刻と崩れ落ちていく時の庭園諸共に虚数空間に吞まれてしまおう。

「くっ！ 一体どうすれば……」

「ま、落ち着きなつて。急いでる時は徒歩よりタクシーだけ」

「タクシー!? ここにどうやってタクシーが来るんだ! 屋内をタクシーが走れるはずないだろう!」

「あるさ。ほら、丁度二台タクシーが迎えにきた」

「なのはーっ!」

「フェイト、無事かい!」

「ユーノくん!」

「アルフ！」

ドウルークのいうタクシーとはユーノとアルフのことだった。

庭園の支配者であるプレシアが倒れたことで、傀儡兵も停止したのだろう。それと同じに庭園が崩壊していくのを感じ、慌てて駆け付けたというところか。

ともあれ二人が来てくれたことは、なのは達三人にとつて地獄に仏だった。

魔法がなければ絶望的だった時間も、魔法の使える二人がいるのならば十分間に合う時間である。

ユーノがクロノとプレシアの二人を抱え、アルフがフェイトとなのはの二人を乗せ――

――さあ、脱出というところで、なのはは気付いた。

「ドウルーク！ なにしてるの？ 早く脱出しないと――」

脱出するなのは達を後目に、ドウルークは呑気にスマホなどを操作している。

この瞬間にも庭園の崩壊は進んでおり、ドウルークの足元は今にも消滅してしまいうだった、そんなことはお構いなしだ

「ん？ 僕はちよつと次話分の編集で忙しいんだよ。このssの作者は性格捻くれてるから、放っておくとエグい展開挟むからこつそり内容弄ってるのさ。」

だから僕のこととは放って脱出してな。僕はここに残るから。具体的に言うとならラってことさ」

「ふざけないでよ！ 友達を置いて逃げるなんて出来るはずないの！」

「分かっているだろう？ なのは、君はもう僕と決別したんだぜ」

「——！」

フェイトとの決戦直前、なのはははつきりとドウルークから差し出された都合の良い手を拒絶して、自分一人で厳しい戦いへと挑んだ。

真つ直ぐに現在を生きる、小さな……けれど大切な勇氣。

なのはは意識してはいなかっただろう。けれどあの時に高町なのははドウルークという補助輪を自ら断ち切り、一人の力で現実へ漕ぎ出したのだ。

そしてプレシアに現実を突き付けられたなのはは、今度は確固たる意志の下で独り立ちを果たしたのである。

であればもはやドウルークなんて都合の良い友達は、高町なのはには必要はないだろう。

「アリサとすずかの二人組と出会い、フェイト・テストアロツサと戦い——高町なのはは強くなった。でも僕といれば、高町なのはは弱くなる。」

子供のようにただ都合の良い現実を求めるだけじゃ、大切な友達を失うだけだぜ。友達は大事にしるよ。僕みたいな妄想男子と仲良く喋っちゃうような電波少女と向き合ってくれる友達なんて滅多にいないんだから」

「そんなこと関係ないよ！ 必要とか不必要だとか！」

孤独という不安で膝を抱えていた時に『始まり』をくれたのはドウルークだ。

妄想だろうと何だろうとドウルークは高町なのはにとつて最初の友達で、掛け替えのない大切な人だ。

それを折角こうして現実に見れてくれたのに、置き去りにするなんて出来ない。

ありのままの気持ち传达了たのはに、ドウルークは微笑む。

「思い出せよ。最初に出逢った時、僕はなんて言った？」

「えー？ えーと……」

「『未短くお忘れを』」

「っ！」

それは高町なのはとドウルークとの間に結ばれた、二人だけの約束。

契約は履行された。約束は達成された。ならば営業悪魔は、地獄へ帰るが道理である。
う。

「僕の生き方に水差さないでくれよ、なのは友達」

高町なのはにとつて都合の良い友達ドウルークは、高町なのはの意思に逆らつて虚数空間へ向かつて歩いていく。

なのはは思わず手を伸ばして、途中で止めた。引き留めてはいけない、そう思った。

「お別れ、なんだね」

「ああ」

「もう二度と会えないんだね」

「ああ、もう僕は君の人生に関わらない」

「なら謝らせて、ごめん。ドウルークのことを忘れることは出来ないよ。ドウルークが忘れてもずっと覚えてる、ずっとずっとお母さんになつてもお婆ちゃんになつても覚えてる。だから最後にこれだけ言わせて」

これが最後だというのならば、高町なのはは万感の思いを込めて。

「ありがとう、ドウルーク」

初めて出会った時の友達ドウルークのように笑って、高町なのはは感謝の言葉を告げ、友達の名前を呼んだ。

庭園が強く揺れ、なのはが一瞬だけ視線を逸らしてしまう。

「まったく契約違反とは酷い友達だ」

だがそれも悪くない。だって本当の友達は「契約」ではなく「友情」によつてこそ繋がるべきものであるから。

抱き止める様に両腕を広げ、ベッドで寝入るように虚数空間へと身を投げ出す。

「ドウルーク!!」

心が決壊したなのはが溜まらず駆けだすのを、現実で得た彼女の友達が必死に押し留める。なのは達の側には自分達がいるから心配するな、ドウルークには彼等がそう言っているように思えた。

もう思い残した事は何もない。ドウルークは妄想の体に宿った確かな本物の温かさを感じながら、虚数空間の果てへと消えていった。

第X I I I話 未短くお忘れを

最低不審者ドウルークが虚数空間へ消えてから数日の時が流れていた。

なのはとユーノの二人は民間協力者なので事件解決すればそこでお役御免だが、クロノ達正規局員はそうはいかない。

事件が終わっても報告書を仕上げたりなんだりという解決後の仕事が残っているのだ。しかも執務官であるクロノはフェイトの裁判も引き受ける予定なので更に仕事が多い。

並みの局員なら忙しきで悲鳴をあげるところだが、そこは最年少執務官であるクロノ・ハラオウン。常人なら睡眠返上の仕事量を残業一時間程度で済ませていた。

だからクロノが頭を悩ませていることは、仕事ではなく別のことにあった。

「まったくこんなこと前代未聞だ」

「随分悩んでるね、クロノ君。お茶持つてこようか」

「……お茶はやめてくれ。今は甘い物より苦味が欲しいんだ。代わりにコーヒを頼むよ」

任せといて、とエイミイが熱々のコーヒを淹れてくれる。無糖の苦さは睡眠不足の

胃によく染みた。

「それでクロノ君が悩んでるのってプレシアのこと？」

「ああ、それもある——というより本来なら僕はそのことをメインに頭を悩ませていた筈なんだろうな」

フェイト・テスタロッサは九歳という年齢と情状酌量の余地十分の背景事情から、裁判でも条件次第無罪はとれるとクロノは睨んでいる。

ただ事件の黒幕だったプレシアの方はそうはいかない。確かに娘の蘇生を願うというのは他人、それも母親であるならば深い共感を覚える理由たりえるだろう。

しかしプレシアがこの事件での罪状はざっくりばらんに数えても公務執行妨害、強盗障害、殺人未遂。極め付きには次元震まで引き起こしている。

次元震を意図的に起こすことは、例えるならば世界に対する殺人未遂。クロノがどう弁護しようと終身刑を無期懲役にするのが限界だろう。

とはいえこれは仕方ないこともある。

どんな事情があろうと罪は罪、罰は罰。民事裁判ならばいざしれず、執務官として情で法を捻じ曲げてはならないという事もクロノは若いながらも理解していた。

しかしクロノが頭を悩ませているのは、そういったあれこれが一切合財綺麗さっぱり消滅していることなのである。

「データベースを含めた各種記録から、アースラや武装局員に対しての攻撃、更にはプレシアが次元震を引き起こしたという事実までもが綺麗さっぱりと抹消されている。しかも僕達のような一部を除外した局員の記憶すら改竄されているという手の込みようだ。僕達を持つ証拠で立件できる。プレシアの罪は、精々がロストロギアの強盗くらいだよ。

これまで幾つもの事件に当たってきたし、多くのロストロギア犯罪を目の当たりにしてきたけれど、こんな事は初めてだ。狸に化かされたような気分だよ」

記憶が改竄された局員やアースラのデータによれば、ジュエルシードはプレシアが意図しない形で勝手に暴走し、それをプレシア自身とクロノ達が協力して止めたという事らしい。

勿論クロノにはそんな記憶はないし、プレシアもそれは同様だ。

後にPT事件と呼称される今回の事件を、正確に把握できているのはクロノ、リンデイ、エイミィ、なのは、ユーノ、フェイト、アルフ、そしてプレシア。事件に特に深く関わった八人だけである。

「どういうことなのか、これって?」

「……人の記憶の操作、情報の改竄。どれもやって出来ないことじゃない」

情報の改竄は兎も角、記憶の改竄は不可能な技術である———というのはあくまで地球の科学水準における常識だ。

記憶の中の映像を正確に映像や画像として出力できるミッドの科学力と魔法力ならば、人間の記憶を書き換えることは十分に可能である。

尤も記憶改変魔法はかなり規制が厳しく、極々限られた場合でしか使用を認められてはいないが。

「じゃあプレシアの罪を少なくしたい誰かが、これをやったの?」

「理論上可能でも現実的に可能かは別さ。アースラの情報改竄一つだって最低でも艦長以上の権限の持ち主じゃないと出来ないし、レイジングハートやバルディッシュのようなインテリジェントデバイスの記録まで改竄するなんて不可能に近い」

「だよね。仮に高度なインテリジェントデバイスの記録にも干渉できるデバイスマスターでも、それをやるにはなのはちやんとフェイトちゃんを倒してデバイスを奪わないといけないわけだし」

「そして記憶改竄された局員の脳をチェックしてみたが、記憶干渉系魔法が使われた形跡は何一つ発見できなかった。つまりこれは——」

「ハ、ハこれは?」

「……………分からない」

「あいらっし」

勿体ぶっつておいて拍子抜けな返答にエイミイがずっこける。

「仕方ないだろう。本当に訳が分からないんだ。けれどももしかしたらという可能性なら思い当たる」

「それって？」

「歴史改竄」

「……！」

情報の改竄、記憶の書き換えなどその四文字と比べれば兎戯に等しい。

歴史改竄、即ち時間への干渉。それは魔法・科学文明ともに地球より遙かに進んだミッドにおいても未知の領域だった。

「もし『過去』そのものが何者かによって書き換わったのだとしたら、記録と記憶が両方とも改竄されていることにも説明がつく。まあそれでも何で僕達八人だけが元の記憶を残しているんだという疑問は残るけどね」

本当のところはどうだか分からない。もしかしたら歴史改竄よりもっと恐ろしい禁忌がなされたのかもしれないし、案外とこれは全部クロノ・ハラウンが見ている夢だったというしようもない真実が待ち受けているかもしれない。

ただもしもクロノの予想が正解に近かったのなら、その犯人はあの男しか考えられなかった。

（ドウルーク……。高町なのはが妄想し、ジュエルシードによって実体化した架空の友

人)

ロストログアであるジュエルシードは、場合によっては現代の魔法科学では実現できない奇跡すら再現してしまう。ドウルークという男は正にその典型例だ。

ジュエルシードによって産み落とされたあの男ならば、歴史改竄やらそれに等しいことすらやってのけるかもしれない。何よりあの男が犯人だとしたら、なるほど高町なのはに近しい人間の記憶だけ残すという気遣いもやりそうである。

そしてクロノがドウルークを犯人とする一番の根拠は、ドウルークの存在も記録から消滅していたことである。

尤も消えているのはドウルークが実体化したという事実だけで、ドウルークという妄想の友達については全員の記憶にしっかり残っていたが。

「どうするの、これから?」

「どうも出来ないさ。仮に僕が『真実』を暴露したところで、精神疾患の疑いありと見做されて終わりだよ。個人的にこういう解決法は卑怯だと思うし認められない。けど起きてしまっている現実を否定することはナンセンスだ。

矛盾していようと認められなかつと、抱えて進むしかないんだ……僕達は」

どれだけ魔法の才能に溢れていようと、時空管理局という次元を超えるほどの組織を作り上げようとも。今を生きる人間は決して神にはなれない。

クロノ達人間に出来るのは精々がこの矛盾だらけの世界で足を止めてしまう人の背中を押してやることくらいだ。

「そうだな……じゃあ局員として一働きしないと」

クロノは連絡を入れる。

一つは母であるリンディに。フェイトを本局へ移送する前に、なのはへの面会をセツティングするためだ。そしてもう一つは、

フェイトたつての希望であるなのはとの面会場所として、クロノがセツティングしたのは海鳴臨海公園。なのはとフェイトが最後に戦った決戦の場所だった。

わりとやややこしい手順に反則技も用いて確保した面会時間のため、時間は余りとれない。けれど、

「おかしいね。いっぱい話したいことがあった筈なのに、フェイトちゃんの顔見たら、全部忘れちゃった」

「私も……。あれこれ考えてたけど、上手く言葉にできないかな」

「じゃあお互い様だね」

なのはが言うのと二人揃って小さく笑ってしまう。

こんなどうでもいい話をしている時間なんてないということは分かっていたが、フェ

イトこんなどうでもいい話を出来る事がなのはにとつては嬉しかった。

もしかしたら、いやきつとフェイトも同じだろう。

「あれから、お母さんとは？」

「まだちよつと上手くはいってない……かな。けどちゃんと向き合つて、何度だつて話をしてみるよ。もしかしたら一生受け入れてはもらえないのかもしれないけど、何度だつて……貴女が私にしてくれたみたいに」

もうなのはが最初に出逢つた哀しい目をした少女はいなかった。たぶん今のフェイトなら大丈夫だろう。

それに時の庭園でプレシアは何度もフェイトを突き放すような事を言っていた。だけれどももしかしたらあれは、

「来てもらったのは、返事をするため」

「え？」

フェイトの言葉で我に返る。ドウルークはもういないというのに、話の途中でも思考に没頭してしまふ悪癖だけは中々治らない。

「君が言ってくれた言葉。友達になりたいって」

「うん、うん！」

「私に出来るなら、私でいいなら、つて。だけど私、どうしていいかわからない。だから

教えて欲しいんだ。どうしたら友達になれるのか」

ほんの一瞬、虚数空間でお別れた友達が脳裏を過ぎる。

だけどなのはは過去は過去として胸にしまい、今日の前にいる現実へ言った。

「……………簡単だよ」

「え？」

「友達になるの、凄く簡単。名前を呼んで？ 始めはそれだけでいいの。君とか貴女とか、そういうのじゃなくて、ちゃんと相手の目を見て、はつきり相手の名前を呼ぶの」
孤独に闇にいた自分を救ってくれた友達のように、場違いなほど明るくなのはは笑いかける。

名前を呼ぶ。余りにも簡単なことにキョトンとしていたフェイトだが、少しづつ笑みが広がっていった。

「私、高町なのは。なのはだよ」

「……………なのは」

「うん、そう」

「な、の、は……………」

「うん」

「ありがとう、なのは……………」

「……うんっ！」

時に戦い、時に争い、時に奪い合い——全体的に戦いだらけだったけれども、最後には協力し合い、こうして確かな絆を得られた。

空は透き通るように青く、陽射しは眩しいほどに降り注ぐ。青天の下、なのははこの暖かさを噛み締めていた。

「時間だ。そろそろいいか？」

話が終わったタイミングで、クロノが声をかけた。

なのはにもフェイトにも話したい事はもつとあったが、アースラの出航時間が迫っている。それはフェイトも分かっていたので名残惜しそうに目を伏せながらも「うん」と頷いた。

「フェイトちゃん！」

クロノと一緒に転移ポートへ歩き出そうとしたフェイトを、なのはは慌てて呼び止める。

髪を結んでいたピンク色のリボンを解き、フェイトに差し出した。

「思い出に出来る物、こんなのかないんだけど……」

「じゃあ、私も」

そう言つてフェイトも自分の髪を結っていた黒いリボンを外し、差し出す。

栗色と金色の髪が陽射しを反射しながら揺れた。お互いのリボンをとって少女たちは、大切な友達へ別れの言葉を言う。

「あ、そうだ。渡すもの、もう一つあったんだ……これ」

わざとらしく前置いたフェイトが渡したのは何の変哲もない茶色い封筒。

だが「開けてみて」というフェイトに従い中身を出すと、なのはが「あっ」と小さく喜びの滲んだ声を漏らす。

「これって……」

封筒に入っていたのは一枚の写真。だけどそれは高町なのはにとつては、どんな宝石よりも嬉しいプレゼントだった。

何故ならその写真に写っていたのは、なのはにとつて掛け替えのない最初の友達ドゥルークだったのだから。

「記憶の映像を映し出す魔法で作ったんだよ………クロノがね」

「なっ！ フェイト、それは黙っている約そ——」

「ありがとうね、クロノくん！ 一生の宝物にするよ！」

「え、あ………どういたしまして」

気恥ずかしげに頬をかきながらクロノは顔を背ける。それが照れ隠しなのは誰の目にも明らかだった。なにせ耳が真っ赤になっている。

これでこの物語はおしまいだ。ドゥルークは虚数空間の彼方へ消え、少女は現実を踏み出した。

今後ドゥルークが高町なのはの人生に関わることはなく、高町なのはも妄想に逃げることなく現実を歩いていくだろう。

けれど高町なのはは忘れない。孤独だった自分に勇気をくれた、最低不審者で最初の友達のことを。

F I N

夕暮れ時。ベンチに座った少女が一人で嗚咽を漏らしていた。

涙を流す少女を慰めてくれる人はいない。親兄弟も、そして友達も存在すらしなかった。どうしようもない孤独感。それが少女の弱い心を、真綿で締め付けるように蝕んでいた。

そんな所にその男は本当に突然に、まるで別世界からやって来たように現れた。

「やあ、お嬢ちゃん。リストラ喰らって意気消沈中のサラリーマンみたいな顔して何やってるんだい？」

趣味の悪い青いスーツに、これまた趣味の悪い髑髏柄のネクタイ。覗き込むようなグリーン色の瞳は猫のように爛々と光っている。年齢は……良く分からない。十代のようにも見えるし、二十代のようにもあるし、三十代のようにも思える。もし口を真一文字に閉じてさえいれば二枚目と断言できた悪魔的美貌の持ち主だが、おどけたように緩ん

だ口元と軽そうな雰囲気、外見的魅力を完全に相殺していた。

「貴方は——」

明らかな不審者だ。きつと十人に聞けば十人がそう断言するだろう。

世の子供達なら親から『知らない人に声をかけられたら気をつけなさい』というような注意はされているものなのだろう。

だがそんな事など教えられていなかっただ少女は、特に警戒することもなかつた。それどころか理屈では説明できない奇妙な安心感すら、この不審者に抱いていたのである。

「誰……ですか？」

何て応えようか。そう十秒ほど迷った挙句に口から出てきたのは、そんな当り障りのない問いかけだった。

彼は暫し頭を捻ると、

「フリーターさー！」

「!？」

「それも月に50万も稼ぐスーパーフリーターだけど、給料は風俗通いで全部パーにする。将来の夢は音楽家かな！ 名前はドウルク！ そして——」

最低な自己紹介をした後、紳士らしく真摯に男は告げる。

これから始まる約束の言葉を。

「未短くお忘れを。君の——“友達”になる男だ」
そう言って少女の人生最初の友達になる男は、悪魔のように微笑んだ。

設定資料

■ドウルーク

年齢：不明（なのはが五歳だった時に生まれ落ちたので、単純計算で無印時点で四歳）

誕生日：不明

身長：190cm

体重：77.7

趣味：風俗通い（友達次第で変わるので真実は不明）

好きな物：良い友達、永遠に続く友情（他人）

嫌いな物：都合の良い友達（自分）、永遠に続く友情（自分）

尊敬する人物：DIO様、フリーザ様、ヴォル様

好きな女性のタイプ：安心院さん

リスペクトする人：デッドプール

将来の夢：友達の自立

弱点：不明

天敵：不明

その他諸々：一切不明

『正体』

第四の壁を平然と破壊し、地の文とすら会話する常識外れ。しかしその正体は幼い頃の高町なのはが「孤独」から逃れるために作り上げた妄想の友達。

ただ余りにも強い妄想縁によつて生まれ落ちたそれは、もはや高町なのはの別人格にも等しい。

そのためドウルークは決して高町なのはの意に反する行動をとらない。なのはが危険な事をやろうとしても止めないし、逆にその背中を押すこともない。ただ起こした行動を全て受け入れ肯定してくれる。

五十万も稼ぐフリーターでありながら風俗が良いで明日の食べ物すら事欠く有様で、小学三年生に飯を強請る駄目人間。このパーソナリティーも高町なのはが「他者に必要とされたい」という願望を反映した設定に過ぎない。わりと筋肉質でガツチリとしているが、これは父・士郎の父性を求められたが故である。

極端な話だが高町なのはが眉目秀麗の完璧超人を欲したのならば、ドウルークはその通りの人物像として現れていただろう。

なお小学三年生であるのはが風俗やら何やらの知識を持っているのは、彼女が孤独から逃れるために最初に頼ったのがPCで、そこから情報を仕入れたからである。一応この設定は第一話から地味に書かれていたりするのだが、たぶん注目してくれた人は誰一人いないだろう。

ドウルークという友達が高町なのはの脳内にしか存在せず、そのためなのは以外の登場人物は誰一人としてドウルークの事を認識していない。

作中でユーノやアリスやすずかななどがドウルークの存在を認識しているように振る舞っていたのは、あくまでなのはを気遣ったの行動である。

逆にリンディやクロノは事情を知らなかったこともあつて、ドウルークの存在を終始一貫して無視しているように描写されていた。リンディが「二人」でよく相談して」と発言したのが、ドウルークの正体を掴むための最大のヒントである。

なおなのはの孤独を生めるために生まれ落ちたドウルークだが、小学校へ入学したなのはが現実の友達を得たことで出現頻度が激変。

毎日のペースが週に一回程度に落ち込み、例えばPT事件がなくなるとも五年生か六年生に上がる頃にはドウルークは自然消滅していた。

しかしフェイトとの戦いを通じてなのはが大きく成長したことで、無意識にドウルークという補助輪を切り離して自立。プレシアから突きつけられた真実としつかり向か

い合うことで、ドウルークという都合の良い友達の影を消し去った。

けれどプレシアに追い詰められ絶体絶命の窮地に陥ったなのは、最後に最初の友達へと手を伸ばし——果たしてジュエルシードはその願いを聞き届けた。

『実体』

ジュエルシードが高町なのはの願いを聞き届けたことで、妄想の中の友達から現実世界へと実体化したドウルーク。

これにより高町なのはの別人格は完全に切り離され、ドウルークという一個の生命体を形成している。

その能力を一言で表すならば「無回答」。何がどこまで出来るのか、どんな力を持つているのか、どうすれば死ぬのか、全てに確固たる「答え」が存在しない。答えがないから上限も下限もないし、限界もありはしない。

戦闘力についても答えがなく数値化不可能なので、気分によってはそのへんの不良AのワンパンでKOになることもあるし、逆に平行宇宙を統べる神様な存在をワンパンでKOすることもある。

ただどちらにせよ何があるかと死ぬことはないので、最強とは言えないが無敵の存在といえる。

なお最大の必殺技は作者のマイページに勝手にアクセスしてからの「勝手に編集」「勝

手に全削除」「勝手にアカウント削除」の三つ。

余りにも無敵過ぎてどうやったって苦したり鬱にしたり虐めたりできないため、定期的に主人公を苦しめないと禁断症状が起きる作者とは相性が極めて悪い。なのでドゥルークが居残ったIFであるA's編やst's編とかを書く予定はない。奇跡も魔法もあるけど救いはないね。

個人的にドゥルークのようなキャラは主人公として出すより、トリックスターのポジションオンやコメデイリリーフとして出すほうが良いような気がする。

『本性』

高町なのは都合の良い友達として想像されたドゥルークは、実体化してもその本質が変わることはない。

自分勝手にナルシストのように映るドゥルークだが、本質的には「友達」への無償奉仕者である。なので賑やかな外面に反して内面は酷く虚無的。

友達や友情を尊んでいるのは間違いなく本当だが、逆に言えばそれくらいしか確かな感情がない。

DIO様やらフリーザ様やらヴォル様を尊敬した人物にあげているのは「実際的には自分しか愛してないのに大勢の他人から愛されている」から。

『第四の壁破壊』

このssが核爆弾級の地雷である元凶にして、ドウルークの最大の特徴。

元々ドウルークはなのはの別人格なので、最初にこの力を目覚めさせたのはドウルークではなくなのは本人である。尤もなのはがドウルークから自立した時点でこの力は永遠に喪失されており、今後なのはが第四の壁を認識することは永劫ない。

ちなみにどうしてなのはがこの能力を得てしまったのかという理由は一応考えてあるのだが、設定にして書き起こすとチープになりそうなので敢えて謎のままにしておく。

『結末』

高町なのはは自立し、プレシアは生存し、原作以上に幸せな結末を迎えた本作。ただし例え妄想だろうと何だろうと、高町なのはが掛け替えのない友人と今生の別離を遂げた本作はハッピーエンドではない。それがドウルークが悪魔的である所以でもある。

都合の良い友達であるドウルークとずっとお別れせず一緒にいれば暫くの安息は得られるだろう。しかしそれは同時に緩やかなる破滅を意味し、故にハッピーエンドは成立しない。

なのはが真の幸福を得るにはドウルークという非現実から決別して、現実を歩む覚悟を持たねばならない。だがそれはドウルークという友達を失うことを意味し、故にハッピーエンドは成立しない。

つまるところ現実から目を背けようと現実を見据えようと、結局のところドウルークという「友達」が加わった段階で、どうやったってハッピーエンドは成立しなくなる。そしてそれは高町なのはのみならず、ドウルークにとつても同様。

悪くてバッドエンド、良くてトゥルーエンドが限界。改めて思うと完全無欠のハッピーエンドが苦手の作者の性格がかなり現れたキャラだと感じる。

『その後』

高町なのはの最初の友達は無数空間へと消えた。今後彼が高町なのはの人生に関わることはない。

例え任務中の事故で再起不能の四文字が浮かび上がるほどの重症を負おうと、例え彼女の娘がテロリストに攫われようと。もうドウルークは決して彼女の前に姿を現すことはないだろう。

だが、或は、もしかしたら。

しわくちやのお婆さんになった少女が、家族に見守られながら人生に幕を閉ぎそうとする時、人生最初の友達は何食わぬ顔でひよつこりと顔を出すかもしれない。

『あくま』

一人の少女の無垢な願いは一人の「悪魔」を生み出した。

アナタが強い孤独感を味った時、悪魔はアナタの前にひよつこりと姿を現し、アナタ

にとって最高の“友達”になるだろう。

未短くお忘れを——自らとの友情の喪失こそを願う、約束の言葉を口にして。